

ク(His)氏はスペンサルの准弟子ながらも、此點に於ては固く科學上の定理を持して曰く(ダーウソンの論を見よ)

『運動感情を生ずと云ふは、熱氣が光明を生ずと云ふと同意義なる乎、運動の若干量は變じて感情の之と同一なる若干量と化し得るか否な決して然らず、神經の運動は其消滅するに當てや只體中の種々なる部分に於ける他の諸神經運動に配分せられ去るのみ、而して是等の諸神經運動は又種々に變化して、或は筋肉に於る收縮の運動となり、或は肉核に於る分泌の運動となり、或は身體組織上に於ける同化の運動となり、或は其他の神經運動と成る也。：勢力互換の法則にして若し生物の身内に行なはるる所の物質的運動に適用せら

るとせば、吾人は分量上より量られ得べき運動の法則に照して之をも論ぜざるを得ず、故に感情の如く分量上量られ能はぬ作用を一たび物質的運動の範圍内に引入れよ、然らば所謂勢力の互換は最早確立し能はじ、只是れ非理と矛盾との中に一直線に奔り入る者のみ、果して然せんには、勢力の互換を論ずるに當りてや、最下等の物質的化學的運動より最上等の神經運動に至るまで、凡て之が全領分は悉く物質的名辭を以て物質的運動として記述せざる可らざらん、而して感情とか意識とか云ふが如き者は全たく亡失し了らん、斯の如く如法に推究め來るや、唯物論(ルビネ)は申すに及ばず、一元論の如きすらも、其無神的なる以上は存立する

宇 宙 觀

こと甚だ六ヶ敷からんとす、故を以てスペンサル氏の如きも、熱心に准唯物的進化論を鼓吹し乍らも、遂に臻極の眞體として一箇の絶對的不可識物 (The Unknowable) と稱する者を立てたり、スペンサル氏开が不可知的、不可測的な所以を説きて曰く、

『余輩若し更に一步を進めて、第一原因の性質は何如んと問ふならば、余輩は頑固なる論理に驅られて一層其説を進めざるを得ず、第一原因なる者は有限なるか、無限なるか、若し有限なりと云はゞ二重の困難に陥るべし、第一原因を有限的と思ふは即ち之を無極なる者と見做さざる也、之を有限なる者とするは即ち其限界の外に物ありと思ふなり、如何となれば凡て限られたる』

有 神 觀 と 無 神 觀

者には之を限る所の物其外にあるべき筈なればなり、然らば今度は此之を限る所の物を何と言はんか、第一原因を限る所の或物は獨自ら存立せる者にして、之に對して第一原因たる者あるべからず、然れども若し斯の如く原因なくして存立する物の有り得ることを許すならば、何れの物にも原因を立つべき道理あること無けん』

又曰く、

『思へば思ふほど不可思議なる衆多の不可思議中に一箇の絶對的に確實なる者ありて存す、即ち萬有の由て出で來る罔極無窮なる一箇の勢力ありて吾人の眼の前に存す』

宇 宙 觀

其説く所何ぞ神學者宗教家の口吻に似たるぞよ！中江篤介氏が知らず識らず有神論の爲に大氣焰を吐きたりし如く(前章を)、スペンサル氏は又知らず識らず第一原因の爲に其健筆を揮へるが如し、何等の奇觀ぞや、イヴラク氏之を評して曰く、

『スペンサル氏が第一原理論の首部に詳述したる矛盾説は彼が望める如く其矛盾を證明し得ざりし、之に反して却つて實在物 (Being) に種々の種類あることを證明し、吾人が實在物を知るの知識は眞實なるを證明し、吾人が絶対的と對待的の間、獨立的實在物と從屬的實在物との間、有心的と無心的との間に立る區別は眞實にして正確なるを證明したり、而して矛盾なる者は

有 神 觀 と 無 神 觀

只スペンサル氏が是等の區別を無視して此と彼とを混同したる處にのみ存すと謂ふべし！

是の如くスペンサル氏が折角骨折りて書きたる第一原理篇 (First Principles) も支離滅裂なる者と化し畢んぬ、嗚呼實體論の海には哲學船舶の難破何ぞ其れ頻繁たる耶！既に斯の如く難破の數繁きに鑑みてか、ハルトマン (Hartmann) の如きは最も慎重に歩を進め、上に已に説ける如き超絶的實有論 (transcendental Realism) を以て一箇の超五官的實體の存在を推定し、併せて宇宙に開闢の大目的あることを主張せり、曰く、『我が所謂實體は夫の無意無識なる妙理の現實せる直覺體のみ、Die Dingen-an-sich sind janur realistische Intuitionen der unbewussten Vernunft. 又曰く、『夫の妙理の施

宇 宙 觀

治 (das Wollen der Vernunft) を到る處に認め、宇宙を一箇の論理的、自決的觀念 (eine logisch selbst bestimmende Idee) の終極的、目的生産物と教示する形而上學こそ、真正の哲學なる可
けれ、云々

此の臻極絶對的實體は——名こそ種々に呼ばるれ——
其物たるや同一にして、實に萬有の根本たる也、之を天帝
と呼ぼうとも、造化と呼ぼうとも、不可識物と呼ぼうとも、
無意の理 (Unconscious Reason) と呼ぼうとも、眞如と呼ぼうとも、
も、プラマ (梵天) と呼ぼうとも、第一原因と呼ぼうとも、开は
大事ならず、要する所は其物の存在する事のみ、
按ずるに、我國に於て此等二大哲學主義——有神主義と
無神主義——を代表する者は、基督教と佛教にして、此二

有 神 觀 と 無 神 觀

す、
大宗教は其根本觀念に於て氷炭の如く相容れざる者と

基督教の信經には第一番に説て曰く、『我は能はざる所なき、
獨一の父なる神を信ず』と、メイソン (Mason) 氏は、其好著
『福音の道』中に於て種々の點より此の問題を講究し、神の
實在を證するに信仰と道理と天啓と經驗 (基督教) を以て
したり、又、マコーネル氏 (Maccol) は該教信經の逐條論證を試
むるに當りて、其第一條の段に述て曰く、

〔前略〕要するに、諸ろの學術に於ける吾人が知識は凡て不完全にし
て且相對的なる而已、決して完全なる絶對の知識にはあらず、
今よりは、夫の無極にして而も靈知の身位を有し、宇宙に徧滿して而
も宇宙の外に、宇宙を離れて存在する所の一神あるを信するに就て
の事實を講究せんとす、先づ第一に生命の不可思議なる事を考察せ

よ、生命は是れ學術上に於て講究すべき最大奥秘の一なり、我等の知る如く、現今我等が棲息する此地球は曾て鎔解せる一大火球のみ、即是れ白熱熾んなる瓦斯の團塊にして、學術上に知れたる生物の如きは如何なる種類にもあれ一瞬時も生活するを得ざりき、其後此火球の表面冷却し、裂縫地方にて鐵屑と稱する如き物成れり、而して今や此冷却したる表面には千萬無量なる生物充滿せり、敢て問ん此の生命は何處よりして來りしぞや、夫れ生命は生命、有生命物より出でざる可らずして、實際自生の物とは一も有ること無しとは、現今科學の結論にして争ふべからず、請ふ本問題に關して我が科學者中の大家が吐きたる語二三を此に引證せん、教授ハックスリー氏曰く、現今の知識の程度にては生物と無生物との間に連環たる者を得ずと、近年まで貌烈頗學士協會の會頭たりしことありて、亦是れ物理學界に泰斗視せらるる一人なるサー、ウキリアム、タムソンは左の語をなせり、曰く、無生の物質は先づ活ける物質の化を受けずば、有生物と成る

こと能はず、余より之を見れば此事が確かに科學の效ふる所なることは猶ほ重力の理法の如く然り、生命は生命より出で、生命の外に生命を生ずる者なしといふとは、萬方に施こし古今に通じて悖らざる學術的信仰箇條として我は之を奉ずるを躊躇せずと、博士チンダルは種々の好試験を屢施して、博士パスチャンが曾て自生の證據と稱せし所の者を全く覆がへし了りぬ、生命は生命より出づとは是れ科學の教ふる所なること照々として斯く明かなり、獨逸の大哲學者カントは説て曰く、吾に生命と物質とを與へよ、然らば吾れ一世界の形成をも説明せん、されど吾に物質のみを與へんか、一蟬蛉の形成をだも説明する能はずと、是故に此問題に就て凡て科學が我等に示し得る所は單に生命は必らず先存の生命より來るといふに止るなり、然らば其先存の生命は何處より來れるや、上に擧げたる「サー、ウキリアム、タムソン」は數年前に此問題を解説せんと試みたり、彼は謂へらく此地球上なる極初の生命の萌芽は或る遠き天體より墜ちたる隕石類

の中より出たるものならんかと、然れども此説は些少の證據だにな
 き。應説として科學者流に擯斥せられたり、或は此説をして眞實ならし
 むるも、我等を啓發する所、毫も之れなきなり、如何となれば其隕石に
 附着せし生命は何處より來しやといふの疑問、必ず起ればなり、故に
 タムソン氏の應説は此不可思議問題を解釋すること、毫も無くして、
 唯本問題を一層背ろへ遠く退けたるのみ、其不可思議なるとは依然
 として不可思議なる也、是を以て我等は此地球上に無量無數の形體
 を以て存在する生命は、或る自然にして存在せる生命より出で來れ
 りと結論するを辭する能はず、吾人が理性は——もし其行歩を追ひ
 ゆかば——必ずや吾人を驅てスペンサル氏の結論に到達せしめん、
 即ち曰く此創造せられたる天地の諸現象は創造せられざる(自然に
 して存する)原因より出來る者なりと、此原因たるや、無限無極無始
 無終にして自らは原因を有せざる一大活勢力なり、而して其必然の
 結果として——もつともスペンサル氏は此結論を避くとはいへど

も——必ず智力と意志とを具備せる一大靈物たらざるべからず、
 是に由て之を觀れば、——默示の事は暫く措き——科學の示す所に
 從ふて我等はスペンサル氏が謂ゆる萬有の本源たる自然にして存
 する有心の大生命、即ち靈知物の存在を信せざるを得ざるなり、想ふ
 に科學者流は自ら斯く迄に深く説き入れるなれば、彼等にして本信
 經の第一條——「我は：獨一の神を信す」——を兎に角容受せざるは
 論理上自家撞着なるに似たり、
 請ふ此結論より生ずる結果中の或者を少しく詳かに論究せん、我等
 が棲息する此世界を通觀して、思想家が必ず先づ第一に認むるは、其
 中に秩序の充ち満てることなりとす、然るに秩序は常に勢力を表す
 る耳ならず、又靈心を表する也、但し毫も秩序なくとも、毫も靈心の證
 跡なくとも、勢力はあるを得ん、地震や噴火山に於て、または瞬時にし
 て忽ちに森林を抜き、或は艦隊を覆す所の暴風に於て、諸君は勢力の
 顯現を見る、然れども是れ勢力を見るのみにして、秩序を見ず、因て又

靈心存在の證跡あるをも見ざるなり、然るに吾人が此世に於て周圍に見る所は之に異なり、勢力もとより夥しといへども、單に勢力のみには非ず、亦秩序をも見る、而して秩序は則ち靈心の存在を表示す、試みに吾人一の骰子を投ずと想像せんに、之を投ずる再三再四なるも、連投必らず其同一表面の出ることあらば、則ち之を何と考定せんか、必ずや此骰子は一面に鉛を入れたるものなりと斷定せん、否な是れ必ず免れざるの斷定ならん、されば此世界に於て秩序の存在する明瞭なる證跡を観るや、吾人の理性は吾人を驅て結論せしむ、曰く、此世界の骰子即ち科學者輩が講説する理法は、其中に鉛を入たる所の者なり、曰く此等の理法は自ら構成したるに非ず、また偶然に成れるにも非ず、曰く主宰の靈心ありて所謂る自然の理法を按排整頓して、或る人々が認めて以て永遠に必然に不易なる者と主張するが如き始終一定不變の作用を呈せしむと、試に四季運行の爽はざるを観よ、遊星の其軌道を正しく走るを観よ、求心離心の兩方が互に相制するの理

法を観よ、此兩力は安排宜きを得て能く遊星をして各其軌道に安んせしむ、然れども當初諸恒星及び諸遊星を布置して、相互に對する現今の位置關係を保たしめたる者は此兩力なりとは謂ふ可らず、引力法の發見者たる「サーアイザック、ニュートン」は曰ふ、求心離心の兩力は諸遊星が其軌道を運行する所以を解説するを得れども、諸遊星の大小、相互間の距離若くは此等をして運行を始めしめたる原動力をば解説するを得ずと、此は是默示或は天啓に由りて非ずば到底解説す可らざるの奧秘なり、吾人此何處にも著明なる整齊及び秩序を解説せんとするに方りてや、此等は皆な萬有に主宰たる靈知者より出でたるものにして、且つ今に於ても其統轄の下に在りと信するに非ずば、連も之を解説すること能はず、時として我等は此宇宙を破壊するに、は全能の神の奇跡を要するが如くに説くあれども、其の實宇宙が斯く維持せられて繼續しつゝあるこそ奇跡なれ、ヨシユアの言下に太陽の止らんとは——字面通りに解す可からざる此現象の科學的説

明は如何なるにもせよ——奇異なりと吾人は思はん、然れども熟ら思へば、太陽の止るは奇異に非ず、却て太陽が日々に運行して已まざるこそ奇異なれ、萬物の速かに運行を止むるは奇異とするに足らず、我等が観る如き整齊秩序を以て此等が常に運行しつゝあるこそ奇異とすべきなれ、假りに夥多の活字が地上に散亂せるを見ると想へ、是れ毫も秩序あるを示す者にあらず、又之を司どる精神(心)ありとも見えざらん、然れども此等の活字若し正しく列を爲し、語を爲し、文を爲し、而かも妙智の觀念を具ふる文を爲さば、則ち諸君の理性は諸君をして斯る秩序は心に由ずば在る能はずと考定せざるを得ざらしめん、請ふ廣く此世界の状相を觀せよ、到る處として此整齊たる秩序の見えざるは無し、今我等が集り居る此建築物を見よ、太陽の光線を容れて空気を防ぐ様に造られたる此厩を見よ、乃ち吾人は此校堂は安排力を有する心の造りし所なりと結論せざるを得ざるなり、自然界に存する色の安排も亦美觀と利用とを兼備して、均く靈心の妙智

を證するに適切なるを見る、地上に最も偏き色は青綠色にして、即ち最も目を悦ばしめ、且つ最も有用なる色たるなり、諸君仰て天空の蒼々たるを歡賞せば、須く記憶すべし、地上の草木が發生し開花するは、此蒼色に由るなりと、之れ無くば草木は枯死し、此地球は現今の愛すべき美觀の衣裳を失なはん、是れ即ち吾人が自然界に於て觀る靈心存在の證據の一なり、進化説は喋々として我等の耳に喧すし——此は後に至りて論ずる所あらんとす——されど其極端なる主唱者が説く所に従ふも、進化とは畢竟何物ぞや、進化の説は萬物の步履を説明するもののみ、其步履の由て出でたる所以を解説せず、萬物の原始に至りては、進化説は依然之を其舊來の地位に置き、即ち透見すべからざる不可思議の暗黒裏に之を捨て置く而已、ダーウキンも進化説は萬物の存在問題を毫も解釋せず、萬物の根原に毫も論及せずと自ら明言せり、其實を言はんには、人もし進化説を取るならば、其が爲す所は世界より遠く神を逐ふに非ずして、反て是れ神を世界に接近せし

め、自然界の萬種の運動順序方法に神をして直接に攝理の力を以て干與せしむる也、進化論者は言ふ此千態萬狀なる形骸に顯はるゝ生命は悉く原始の生素より發し來れりと、如何にも吾人が知れる如く、生物は元來變化する者なり、然れども一定の機械的原因は一定の結果を生ずべきに非ずや、果して然らば原始の生素が我等の見る如き無数の生命に變遷發達し來れる所以は、神の化工を措きては、如何にしてか之を説明するを得ん、主宰の靈心ありて該生素開發の步履を指導すとの假定説を立るに非ば、萬物進化の説は特別創造の説よりも却つて幾層大いなる不可思議説ならん而已、豈之を以て天地の奧秘を解き得たりと僭稱すべけんや、』

墨子の有神有鬼論大いに此種の議論に似たる所ありて、又頗る觀るべき者なれども、开は次章に譲るべし、嘗て鳥尾得庵居士は『眞正哲學無神論』を著はして、此種の

有神觀を痛撃し、佛法護持の大任を身に擔はれたり、當時某氏の詳評ありたりしが、今其幾分を左に抄録せんと欲す、

『鳥尾得庵居士は護法の大家なり、破邪顯正の勇士にして才辯殆ど比類なし、大聲に世を警醒して曰く、

『看よ玉樓瓊筵に一生を送る王侯も生るゝ時に生れ來り、死し去る時に死し去る、寤寐動靜ともに己が勝手にはならぬ、樹陰草上に一生を送る乞食も矢張り此通りで彼れに於ても一分を増さず、これに於ても一分を減せず、』

と是の如く大悟し、世を教導するは聖賢の分なりとして、茲に此眞正哲學無神論といふを著はされたり、昔し宋の觀文殿大學士丞相張商英無盡居士佛教の駁撃せらるゝを憤慨して自ら振つて護法論といふを著はし、韓退之歐陽脩等の妄説を排除して佛法の悔どる可らざ

るを詳説せられたり、其言公明正大を極めて讀者を感服せしめ、其辯江河の決せるが如くにして抵抗す可らず、我竊に之を推して古今護法書の第一等と爲せり、今此得庵居士の無神論を拜讀するに、其筆鋒未だ無盡居士の妙域に達する能はずと雖も、言語雄壯にして議論縱横、滾滾として涌き出で、浩浩として溢れ流る、實に懸河瀉水の辯と謂ふ可し、

然りと雖も居士も亦東洋流の一豪傑たる而已、其論辯する所焉んぞ亦東洋流たらざるを得んや、其主張するは徒に放縱に流れて人を感服せしむるの力ある無し、只是推附け言のみ、佛教論法因明に所謂「似能立、似能破」たる而已、

此書題して無神論といふ、其意の在る所知る可し、昔し無盡居士は前輩有作無佛論者何自蔽之甚也と歎じて専ら佛法の辨護に力を盡されたり、是其地位退守に在るなり、今のは即ち然らず、他教の神を排斥せんとするに在れば、其進撃の方向を取れること明かなり、蓋し佛教

有 神 觀 と 無 神 觀

衰頹萎靡して振はざるの今日、は之が信徒たる者退嬰防禦に汲々として尙日足らざるに、單騎突出して砲煙彈雨に沐浴し、直ちに敵將の首級を擧て戰勝を大呼せんとするは、天遣一方の大將と見受らる、只其執る所の武器が火繩銃の舊套を脱せざるを惜む而已、

先此に所謂神とは如何なる神を指す者なるか、是即ち耶蘇教に所謂造化主宰、全知全能、獨一無二の眞神を指す者なり、神道に所謂八百萬の神を謂ふに非ず、佛教に所謂教法守護神を謂ふに非ず、是を以て知る其意専ら耶蘇教を排斥するに在ることを、實に然り、神道の如きは唯に之を排斥せざる而已ならず、却つて之を辯護する所鮮からず、宜なる哉、神道家たる千家尊福氏の序文ある事、曰く

『其無神といふ名のいみじきに驚きて如何なる事をか記るされたらんと讀み見れば、其論の高尙なるは更なり、誰しの人にも辨まへ易く記るされし心、しらひの深きにいたくかまけぬ、况て無神といふは、彼の七日のほどに、天地萬物を造れりといふ類ひの神は無し、』

といふ論に、いふれば、然るすぢの說に惑はされがちなる今の世の人のためにはいと善き教なりけりと嬉しき言んかた無し』

是にて其本意の在る所を知るべし、昔ソクラテスは其國の群神を排斥して眞の神に非ずとか言ひたればとて、遂に政府より鳩毒を飲まされて死せり、之に鑑がみてか羅馬の哲詩人(上に引)ルクレチウスは、當時世俗の禮拜せる群鬼衆神を其哲論中に敬して遠ざけ、之を毫も人間に關係なき天上に高く祭り籠めり、鳥尾居士も亦ルクレチウスの掣に倣へる者歟、

居士今斷然無神と説く、其故果して如何、居士の曰く

『人に思議心あれば物に不思議がある、此不思議は思議心の未だ至らぬ分際である、此不思議が古往今來人間世界の一大妄想の巢窟となる、賢不肖となく此妄想中に彷徨して恣に妄見を起す、此の妄見に相應して一神多神の邪説をなす、一神多神共に臆想である、』

先是の如く其大體を簡明に説き示さる、是より後は只此數句を布演

解説する而已、

居士は本一神説を駁するを目的とすれども、其勢多神説にも涉らざるを得ざるが故に、先是の如く、二神多神共に臆想である」と一聲に説き下せり、而して多少辯論の後又之が區別を述べて曰く、

『要を取て言はば古來より此暗境界(即ち不思議界)に建立する者は一神他神の兩説である、多神の説は多くは愚人の鼻先の臆想である、一神の説は妄想の深き者が迷ひに迷ひを重ねたる臆想である、故に多神の説は迷が浅い、假令悟らすとも物に對して恭敬の心を失なはぬ、害が少ない、一神の説は膏肓の病である、思ひ入れ迷ふて固く執着す、一神を干になし、物に對して輕慢の心を生ずるのである』
是實に驚く可きの解釋といふべし、古來天下諸國の聖賢が理を究め道を求めて世に示す所の語は正に之れと反對す、釋迦自身の言説にも是の若き解釋は見當らじ、然りと雖も讀者之を怪しむ勿れ、居士は我國古來の三教神儒佛を取て外教を防がんとするなれば多神説を

宇 宙 觀

四六

無下に排斥する能はず、如何となれば神道は即ち多神教の類なればなり、

倍是の如く一神説を誹りおきて頓て其虚妄なる理由を示さる、其言に曰く

『果して神ありて萬物を造作するや、若は然らざるやと初一心に疑ふ心を起すも早く已に臆想である、何が故ぞ、神ありと聞て之を疑ふ心の生ずるは他の妄想臆見によりて此疑心を引起さるゝに由る、此妄想を以て一切を觀察すれば其安排布置如何にも無心に成りし者と思はれぬ、依て終に邪見を起す、是は言はゞ氣病である、』此言一分は理ありと雖も疑心は亦智慧を得るの本たるを記憶せざる可らず、夫れ鳥獸は物事を疑ふの念に乏し、故を以て思量發明の事其中にある無し、人は此疑あり、故に此悟あり、疑ふのみにて臆想を逞うすれば一步の違ひ千里を誤まるの恐ありと雖も、世上の研究法は是の如く無茶苦茶なる者にあらず、學術の定理を取り、事物の現相を

有 神 觀 と 無 神 觀

考へ、下より歸納法によりて本に溯り、上より演繹法によりて末に推及ばし、是の如く上下して其間に眞理を發見す、此推測法に由りて確定する者は精確と見做して可なり、若此法にして倚る可らずんば、世上實に事理の存する無けん、二二が三も亦可なり、三三が十も豈あらざらんや、萬物の安排布置を見て造化神の存在を信する者は實に此正確たる論法に由て信するなり、居士之を概して妄想邪見となすは推附け言にして道理ある無し、居士若し此造化神といふを神と稱するを好まずんば、大原因と名くるも善し、更に進んで涅槃と名くるも可なり、只之を虚妄と爲すは其當を得たる者に非るなり、今然らば如何にして此大現象に對すべきやと問ふに、居士の曰く、

『眞正の學者は始めよりかゝる臆想を爲さず、只々不思議分際に對ふて是何の子細ぞと平易に觀察を下すである、假令底を拂ふて眞理を安立するに至らざるも、神ありとは臆想せぬ、』

然れども、是何の子細ぞと觀察するは即ち其何たるを疑ひて之を尋

四七

宇 宙 觀

究する者ならずや、我は更に是と彼との區別を見ざるなり、且又神ありと懸想せぬと斷言するも非なり、蓋神とは靈妙不測の尊稱にして其大本源に蒙らする一の稱呼たるに過ぎず、夫物は名に即かずして實に即く、何ぞ其名を悪んで其物を棄るや、居士又曰く、

『天地間の種々の不思議は盡とくあるといふ證據にはならぬ、天地の妙を極めたるは即ち其天地たる所である、妙なれば必らず神ありて主宰するといふ懸説は立たぬ、若し妙なれば神ありとすれば神は妙といふ事の異名までの事である、』

實に妙なれば直ちに神ありとは言ふ可らざれども、妙なれば必らず其原因あるべし、神とは實に此原因の假の名なり、具に上に言へるが如し、然るを之をもて妙といふ事の異名とするは萬物の體を形容する者を直に神といふが如くにて分別に明かならずと謂ふべし、夫宇宙の萬有は現象なり假體なり、已に此現象假體あれば之に對す

有 神 觀 と 無 神 觀

る眞躰あるべきは理の免がれ難き所にして、世間の學問殊に哲學は此眞躰に究めたらんと志す者なり、然れば居士が又語を續て

『萬物の上に顯はれたる意匠結構は有神論の證據にも無神論の證據にもならぬ、』

と斷定せらるるは世間の學理を蹈附けにする者といふべし、然りと雖も居士が是の如く言はるゝは其持論なる業感(即ち業識感得)の佛理を主張せんが爲めの張本なり、學術が無限の勢力を振ふ今日に在て大膽にも業感を以て宇宙の現象を解説し去らんとする其勇氣實に感ずるに餘りあり、但し是事に關する辨論は最後に至りて靈魂有無の事と併せて記す可し、今は尙進んで多神の如何を見るに、居士の曰く、

『多神説も種々あるが中に禽獸草木狐狸を祭るは大なる誤りなれども、其中には許すべき者もある、聖人王者天地山川の類は其徳を尊崇するなれば、之を祭るは許すべし、是は造化者などの空論では

宇 宙 觀

無い、道理のある事である、是に由て知れ人鬼を祭るは當然の事である、其亡者等の靈魂が存在して居るに相違ない、又天神七代地神五代も至當な事である、此諸人鬼後に必らず怒つて耶蘇教を攻撃するならん、』

四三

是の如く居士は有るが如く無きが如き曖昧の間に神道の神々を置きて自分の都合に循つて之を使用せらる、然れども居士が大主意は佛理にあり、此佛理を推し來りて果して是の如く多神教が立つを得るか、一神教が倒るるに至るか、是等の諸事は尙居士が是より眞面目を顯はす所に徴せん、蓋し一神多神の有無虚實道理不道理は居士が天地萬物の由て起れる理由を説くの如何に依て定まるべし、得庵居士已に無比の雄辯を振つて無神説を主張し、無神説を主張すと雖も、尙我國の神道を庇蔭し、其所謂眞正哲學たる無神境の内に於て故らに高天が原を設けて彼の八百萬の神等を神集へに此に集へ、

有 神 觀 と 無 神 觀

既に破邪の功を遂げればとて、是より顯正の事務に取掛り、以て自ら守るの道を明かにせらる、其の軍法奇精宜しきに適ひ、進退度に當りて坐ろに其伎倆の拔群なるを感稱せしむ、然りと雖も其指揮せらるゝ兵衆の如きは魔術を以て造り出せる幻人の如くにして實體を見究めがたし、上に掲げたる居士の説に依れば一神の説は謬妄の極にして到底立つ可らずと雖も、多神の説は恕して立たしむべき理由の存するありと謂ふ也、而して、又其衆多の神は重に父母先祖の靈を其儘祭れる者にして、傍に又聖王山川等を祭れる者もあれば共に其根本基く所ありて空しからずとぞ、是によりて觀來れば死者の靈魂は其人の死後にも依然として存する者と謂はざるを得ず、如何となれば若し滅し盡したらんには其物已に無に歸す、尙何を神として祭らんや、此事を論ずるに當りて居士は支離滅裂殆んど解す可らざる無用の儒説を掲げ來りて最も得意顔に喋喋辯説せらる、即ち居士の曰く

四二

『此の鬼神の事は怪力亂神と云ふて人の迷より生ずる事が多い、中に就て聖賢の人も之を信する一理がある、易に精氣物を爲し遊魂變を爲す、是故に鬼神の精氣を知るゝある、』

是の如く易の文句を借來りて遊魂の宇宙に出沒して或は禎祥を爲し、或は妖孽を爲す事を證驗し、暗に此所謂鬼神八百萬の神等の存在を證明せらる、是會て言たる如く神儒佛の三道を以て耶蘇教を排するに在るが故に、是の如く無用の易文を引來りて一段の辯論を開ける者なり、然れども此事誠に曖昧にして殆ど遊魂の取り留められぬが如し、如何となれば是の如く遊魂が幽冥にぶらつき居て種々の變を爲すと言ひながら、又直ちに謂へるあり、云く

『孔子は斯く言はれた事がある、操れば即ち存し、舍れば則ち亡す、出入時なく、其郷を知る事なきは唯心の謂かと、然れば鬼神は一種心の異名と悟られた者と見える、』

此後段の説に依れば鬼神即ち遊魂の類は唯心の異名となり了れり、

是の如き混亂紛錯殆ど歸趣を得難きの説は此上討究するの價値なき者として、是より居士が佛理を取て眞面目を顯はす所を伺見んとす、否居士已に自ら此説を破し去れり、

『精氣神魂の事も別々に見えるなれど、萬物唯心造の上から見ると此二を取離す事はならぬ、』

是實に居士が業感の眞面目説を述べんとするの起本なり、先天地萬物の如何にして發生するやを明かにせざれば多神幽魂等の存否を明らかめ難き所あるを以て、居士の順序に循つて眞先に其事を略擧す可し、居士云く

『此心は天地一枚である、三千大千世界を引包んで漏さぬ、……：天と云ひ地と云ふも此心の中に現はるる影である、三千大千世界と云ふも此心の中に差別する模様である、……：種々の道理も説けば説かるゝなれど畢竟此心の分別である、此心の作用である、』

斯の如く宇宙の萬象は皆此心の書き出し、思ひ別つ所にして其物自

身に自性を具ふるに非ず、是を以て固より造物主等の其間に工作を施せる所ある可くもあらず、是其真面目なり、我は今此事に付て之が當否を辯論する事を爲さずして直ちに如何にして此靈氣樓の空世界が是の如く生生死死綿々相續して環の端なきが如くに環りて終に止む時あらざるやを尋ね究めんとす、居士の曰く

『此心ありしより以來此法がある、此法に迷ひ、此心に迷ひて業種子を造る、……此業種子が輪廻の本である、』

是さのみ珍しき説には非ざれども、是にて佛道の萬物發生相續説の一斑を伺ひ知らる可し、是強ち居士の發明説に非ず、佛敎の本説なり、唯に佛敎説たる而已ならず、西洋哲學中の唯心論の説く所なり、此説の道理に適ふや否やは一朝一夕に論じ盡さるゝ所に非れば、此には只一言を記するに止む可し、曰く萬有は皆悉く奇妙の構造を有すれば萬有の大本源たる不思議より靈妙不測の道に由て是の如く顯はれ出たるなる可しと信ずると、萬物は虛妄無性の空物幻體にして唯

此我心より造り出せる者なりと信ずると、此二つの中今日の哲理を以つて裁判すれば、前者は許多の確證らしき物あり、後者は徹頭徹尾想像を以て成立つに過ぎず、否只是のみならず、此説たる唯佛敎の唯識論に本づくのみ、究竟説には非る也、

偕此辯論は此に止めて更に進んで本書の目的たる三敎合從策の成敗を察するに已に前に見えたる如く儒道の遊魂爲變の説は居士の應援に來る途中に於て早くも消えて狐火の迹方も无きに至りたれば、殘れる者は神道のみ、神道は固より微力にして居士を援くるの勢なし、却つて居士の翼下に身を寄する而已、竊に思ふに居士如何程これに庇蔭せんとするとも、若し八百萬の神の實在を證明する能はずんば、其援助は徒勞に歸せん耳、

居士屢謂へらく、神道の多神は多く祖先の靈を祭れる者なれば決して空々たる者に非ずと、善し、然らば其祖先衆は靈魂と成つて今尙實在するや、請ふ之を明にせよ、先問はん、人の靈魂は死後にも尙依然と

して自己の體を具するや否や、居士之に答て曰く、
 『此身は地水火風である、死ぬれば元の地水火風にそれぞれ還るま
 で、ある、此心も一切衆生と平等である、天地一枚である、何も生死
 のある可き筈はない、當處に生じて當處に滅す、其中に因縁を追ふ
 て果報を受ける者は、只此業種子である、……此業種子は人間の死
 した後までも存在してあるべき筈は無い様なものなれども、萬物
 唯心造の上から見ると此肉身と云ふ者も無く、獨り業のみがあ
 る、……智に依れば此業が段々減じて終に滅するに至る、』
 此言に依れば彼の祖先等も亦死後に靈魂ある可らず、只業のみ残り
 しならん、而して業は必ず流轉して止まざる者なれば、今天堂にある
 か、又は餓鬼道にあるか、固より知り難し、然れども此娑婆に幽霊とな
 りて居らざるは明確たり、是即ち自語相違の過を犯して自ら己れの
 前論を打消す者なり、現に一回此土を踏みし者さへ是の如し、況んや
 其他の假設神をや、但し得庵居士は才辯比ひ無し、何ぞ是式の結論に

遭て避易せんや、必らず富樓那の辯を驅來りて言はれん、
 『但し大悟して打明て言つて見れば、神といふものつまり一種の法
 である、此法が立つと意識で分別する故に、善神も立つれば立つ、惡
 神も立つれば立つ、一神を立て多神を取除けば、是も人間の分別通
 りに勝手になる者である、多神を立て一神を打倒すも其通りで
 ある、天地山河乃至家屋器物さへも人間の妄想より生起する程の
 事なれば、況て目に見えぬ物事をや、云々』
 是の如く打明けて語らるゝを聽けば引絞りたる弓も放たれず、振上
 げたる太刀も打おろされず、何とやら氣脱けのしたる心地せらる、嗚
 呼居士自ら無神有神一神多神の議をもて何れにても立つれば立派
 に立つとせらる、批評者また何をか之に加へん、前言戲之耳なる哉、』

第十六章 死生及靈魂有無滅不滅問題

物靈并行説と物靈合體論

本章に於て余輩は死生問題及び靈魂有無滅不滅問題を論ぜんと欲す、先づ死生より端を發せんに、勿論死生は靈魂滅不滅問題と全然其範圍を同じうする者に非ず、嚴密に言へば後者は只人類につきて獨り言ふべき而已、之に反して死生は草木禽獸に均しく通ずるものにして、有情非常孰れか生死なからんや、生死は萬類の皆同うする所なり、生死は即ち新陳代謝の方法にして、世界を常に少壯ならしむる所以の工夫なりとす、故に之を人生(余輩は人間のみを就て論ず)の二大事件と名く、而して兩ながら共に多少苦痛を

宇 宙 觀

死生及靈魂有無滅不滅問題

を経ざる可らず、但し迎ふるは喜ぶべく、送るは悲しむべく感ぜらるゝ、人情として、古來生は賀すべき事とせられ、死は弔すべき事とせらるゝ、微笑は生に伴なひ、涕淚は死に伴なふ也、是を以て生は古來非常に愛せられ、長生久視の道の世に講ぜらるゝ、亦遠し、夫の鍊金術仙術養生法(今日の養生法と混同する勿れ)等は皆延齡長生の法を究むる者とす、之を又一に道術と稱す、傳へ云ふ道術は元始に天尊紫筆を以て之を空青之林に書きたまふ、字皆廣長一丈、以て玉晨道君に授け、玉晨之を玄一真人に授け、玄一之を天真真人に授け、真人其文を細書して秘藏す、軒轅黃帝の時に到りて、皇人之を黃帝に授く、故に道術を黃老の道と號して、黃帝を祖とす、其法服

藥及び行氣を以て秘傳とす、經に曰く、上藥は人をして身安く命延びしめ、昇りて天神となり、上下に遨遊して萬靈を使役せしむ、中藥は性を養ひ、下藥は病を除く、云々、要するに穀類を斷ちて身を軽くし、生を長うするに在り、とす、仙藥に至りては其品固より多し、然れども丹砂、金銀、珠玉、芝類、雲母、雄黃、太乙、禹餘糧等を以て其最とす、行氣は即ち新鮮の空氣を氣海丹田に收めて出さざるの工夫を謂ふ、抱朴子曰く、『夫五穀猶能活人、人得之則生、人絶之則死、又況於上品之神藥、其益人豈不萬倍於五穀耶、』又曰く、『夫人在氣中、氣在人中、自天地至於萬物、無不須氣以生者也、善行氣者、內以養身、外以却惡、然百姓日用而不知焉、』云々、即ち是なり、

（註行氣の類を一に調息と稱す、醫家亦往々內經道説を引て自ら助く、

生死及靈魂無不滅問題

其調息を説くを見るに、云々、
 『調息一法貫徹三教、大之可以入道、小用亦可養生、故迦文垂教、以視鼻端白、數出入息、爲止觀、初門、莊子南華經曰、至人之息、以踵、大易隨卦曰、君子以嚮晦入宴息、王龍溪曰、古之至人、有息無睡、故曰嚮晦入宴息、宴息之法、當向晦時、耳無聞、目無見、四體無動、心無思慮、如種火相似、先天元神元氣、停育相抱、真意綿綿、老子曰、綿綿若存、開闔自然、與虛空同體、故能與虛空同壽也、』云々、

又蘇子瞻の養生頌に曰く、

「已儆方食、未飽先止、散步逍遙、務令腹空、當腹空時、即便入室、不拘晝夜、坐臥自便、唯在攝身、使如木偶、常自念言、我今此身、若少動搖、如毫髮許、便墮地獄、如商君法、如孫武令事、在必行、有死無犯、又用佛語及老聃語、視鼻端白、數出入息、綿綿若存、用之不勤、數至數百、此心寂然、此身兀然、與虛空等、不煩禁制、自然不動、數至數千、或不能數、則有一法、強名曰隨、與息俱出、復與俱入、隨之不已、一旦自住、不出不入、忽覺此息、從毛竅中、八萬四千雲蒸、

宇 宙 觀

雨散無始以來諸病自除、諸障自滅、自然明悟、定能覺悟如盲人忽然有眼、此時何用求人指路、是故老人言盡于此、

道經には又六字訣、四字訣等の秘傳あり、俱に行氣調息の方法なり、皆長生久視を企て圖るの術なる而已、

彼等は黃帝老子等を以て其祖聖とす、女子に在ては所謂西王母を以て其最とす、東方朔の如きは西王母が漢の武帝に齎らせる瑤池の桃三箇を竊み食ひて長生の術を得たりと稱す、今列仙傳に依りて西王母の略傳を掲げんに、大凡左の如し、

『西王母即龜臺金母也、以西華至妙之氣化而生於伊川、姓候諱回、字婉令、一字太虛、配位西方、與東王公共理二氣、調成天地、陶鈎萬品、凡上天下地、女子之登仙得道者、咸所隸焉、居崑崙之圃、閭風之苑、玉樓玄臺、九層、左帶瑤池、右環翠水、女五人、華林媚蘭、青娥、瑤姬、玉卮、周穆王八駿、乃執白圭、玄璧、謁見西王母、復觴母乎瑤池之上、母爲王謠曰、白雲在天、山陵自出、道里悠遠、山川間之、將子無死、尙能復來、後漢元封元年、降武帝殿、母進蟠桃七、

生死及靈魂無不滅問題

枚於帝、自食其二、帝欲留核、母曰、此桃非世間所有、三千年一實耳、偶東方朔於麻間、親之、母知之、乃指曰、此兒已三偷吾桃矣、云々
傳へ云ふ黃帝神遊して、華胥氏之國に到り、寤めて後、惺然自得し、遂に登仙したりと、華胥氏の國は道家者流のユトーピア也、彼等が生を樂みて、此土に戀々たる驚くべき者あり、寧ろ奇ならずとせん耶！

但し之と正反對なる觀念も亦古くより行はれざりしに非ず、帝堯嘗て華國に遊觀せしに、華國の封人（史）帝を祝して曰く、使聖人壽富多男子と、堯對へて曰く、辭多男子則多懼、富則多事、壽則多辱と、聖王と稱せらるゝ堯帝の語としては稍厭生の臭味濃過ぐと雖ども、人生を達觀せる者は初より此の如き告白を爲さざるを得ざりしも亦事實なりとす、封人の答は健全なる常識を有する徒の考にし

て、俱に一種の人生觀を言ひ顯はせる後人の僞托なるや論なき也。封人の所謂る天下有道、與物共昌、天下無道、修德就間、千歲之後、厭世去而上僊、乘彼白雲、至于帝鄉、雖壽何辱之有は、兼ねて又道家の主張を寓す、但し均く黃老の道を唱へたりとは雖ども、列子の如きは道家者流の長生久視をさのみ重んぜざりし也。列子の死生觀は大いに觀るべき者あるが如し、今之を和解すれば大略左の如し、

『黃帝の書に曰く、形動くや、形を生ぜずして影を生ず、聲動くや、聲を生ぜずして響を生ず、無動くや、無を生ぜずして有を生ず、形ある者は必ず終あるべし、天地も終らん乎、然り、固より有形なれば天地も終らん、道も終らん乎、否な、本より始なければ終なけん、恒に變化して止まらざれば盡くること能はじ、之を要するに、有生は不生に復し、有形は無形に復す、』

『生は理の必然終るべき者なり、終る者は終らざるを得ず、其の事たるや生ずる者の生ぜざるを得ざるが如し、然るに其生を永うし、其終を止めんと欲するは、理に暗き也、精神は天の分にして、形骸は地の分なれば、天に屬する者は清んで散じ地に屬するは濁つて聚るを法とす、精神形を離るゝや、各其眞に歸す、故に之を鬼(鬼歸音相通)と謂ふ、鬼は歸なり、其眞宅に歸る也、黃帝曰、精神入其門、形骸反其根、我尙何存、』

『人生るゝより死ぬるに至るまで大に化する者四あり、嬰孩少壯老耄死亡是なり、嬰孩は氣専ら志一にして、和

の至れる境なれば、物と傷る無く、徳これに加ふる莫し、
死亡の境に在りては、休息に至りて其極に反る
者とす、

是れ死を視ること歸るが如くする可羨の境なり、榮啓期
及び拾穂翁の覺悟豈歎稱す可らざらむや、

(註) 家語列子俱に孔子が榮啓期と會談したる由を記す、亦是れ一美
談なり、其文に曰く、

孔子遊於太山、見榮啓期行乎成之野、鹿裘索帶、鼓琴而歌、孔子問曰、先生
所以樂何也、對曰、吾樂甚多、天生萬物、唯人為貴、而吾得為人、是一樂也、男
女之別、男尊女卑、故以男為貴、吾既得為男矣、是二樂也、人生有不見日月、
不免禰裸者、吾既已行年九十矣、是三樂也、貧者士之常也、死者人之終也、
處常得終、當何憂哉、孔子曰、善乎、能自寬者也、

次に拾穂翁の話は左の如し、是亦佳話たるを失なはず、

林類年且百歲、底春被裘、拾遺穗於故畦、並歌並進、孔子適衛、望之於野、顧
謂弟子曰、彼叟可與言者、試往訊之、子貢請行、逆之隴端、面之而嘆曰、先生
曾不悔乎、而行歌拾穂、林類行不留、歌不輟、子貢叩之不已、乃仰而應曰、吾
何悔邪、子貢曰、先生少不勤行、長不競時、老無妻子、死期將至、亦有何樂而拾
穂行歌乎、林類笑曰、吾之所以為樂、人皆有之、而反以為憂、少不勤行、長不
競時、故能壽若此、老無妻子、死期將至、故能樂若此、子貢曰、壽者人之情、死
者人之惡、子以死為樂、何也、林類曰、死之與生、一往一反、故死於是者、安知
不生於彼、故吾知其不相若矣、吾又安知營々而求生、非惑乎、亦又安知吾
今之死、不愈昔之生乎、子貢聞之不喻、其意還以告夫子、夫子曰、吾知其可
與言、果然、然彼得之而不盡者也、

我が中江篤介氏も亦命を知れる人なりき、余輩は嘗て居
士の『一年有半』を評して、左の如く言ひたる事あり、本説に
大關涉あるが故に、其一部分を左に摘録す、

宇 宙 觀

『兆民居士の餘命は嚮には一年有半と限られたり、而して今は僅々二箇月(續る其月を謂ふ)』と宣告せられぬ!!人は則ち盛々として蓋し其愛にたへじ、居士は則ち綽々として殆んど其樂を革めざるが如し、平凡非凡の分君子小人の別茲に至て尤も顯然たりとや謂ふべけん歟、中江氏は其命の一年有半に縮まれるを見るや、從容として自ら評すら

一年半、諸君は短促なりと曰はん、余は極めて悠久なりと曰ふ、若し短と曰はん、と欲せば、十年短なり、五十年も短なり、百年も短なり、夫れ生時限りありて死後限りなし、限りあるを以て限り無きに比す、短には非ざる也、始より無き也、若し爲す有りて且つ樂むに於ては、一年半是れ優に利用するに足らずや、嗚呼所謂一年半も無也、五十年百年も無也、即ち我儕は是れ虛無海上一虛舟

寔に是れ哲學者の大覺悟斯くありてこそ中江篤介の中江篤介たる眞面目を視つべけれ、古人曰く、『既に大事業を天下に成し了へたる者は其

生死及靈魂無不滅問題

死の早きに失する無し』と、宜なる哉、縦やカークホフروت(Kirkwhite)の如く二十歳以下にして夭すとも、又はバイロンの如く卅歳前後にして死すとも、其詩の天下に傳はるべく萬世に朽ざるべき者あらんには、是即ち八十歳百歳の長壽を保てる者と同じき而已ならず、却つてウラルツウラルスやコルレツヂの如く已に其インスピレーション(Inspiration)の涸れつ、奇思妙想の復天外より落ち来る者なきを世に表白するの不愉快を免がるるの幸あるに非ずや、眞に英雄と美人とは老えしむ可らず、人生の大怪物スファンクス(Sphinx)を一言に倒し去りたるイーヂバス(Oedipus)の末路、才媛美姬の雲の如くなる中に獨り其國色を擅まゝにせし小町の成の果、一に何ぞ慘憺たるや、是豈古人が借て以て人生のあぢきなきを代表したる寓言にあらざらんや、然れば絶海の一孤島聖ヘレナの巖石上に一舉手一投足を檢制せられて憤怨懊惱せるナボレオンよりも、夫の天下の中心たる羅馬府内の大政廳に於て、而も英雄豪傑の羅列せる彫像の前に當りてブルータスの兇刃に時ならぬ紅の花を咲せし

宇 宙 觀

シザルこそは百千倍も幸運の人なりけめ、英名一時西亞の天地を震撼し、波斯の大國をしてさへ一時其危き累卵の如くならしめたりしも、一たび戦敗れて捕虜となるや、龍頭蛇尾忽ちにして羅馬の一紳士が妻女と墮落し了れる、東洋の女傑、パルミラ (Palmyra) の女王ゼノビア (Zenobia) よりは、夫の アクチアム (Achum) の海戦一たび敗るゝや、翠帳紅圍の裏に、マークアントニ (Mark Antony) と盡きぬ名残を惜みつゝも、他かぬ別れを悲しみつゝも、深く鳩毒を仰ぎて、眞盛の花を散らせし絶世の美人 エジプト の女王 クレオパトラ こそは畢竟遙かに仕合よかりし者なるらめ、

寔に『生時限ありて死後限なし』、千秋萬古北邙塵、達觀し來れば、生は眞に之れ暫假、死は眞に之れ永遠、永遠の安息を以て暫假の匆忙に比す、其優劣や實に哲學者の沈思冥想を價ひすと謂ふべし、『死の幸福は墓側に足を運びたる人、棺桶に片足入れたる人』にして始めて之を感ず』とは、所謂 中江哲學 の元祖、中興の祖 ルクレチヤス (Lucretius) が二千年の昔に

生死及靈魂無不滅問題

已に道破したる所なり、只此際に至りて 中江氏 が命に安んじて従容たるは、余輩の大いに多とする所なり、來生を信せざる者は動もすれば自暴自棄して言んとす、使我有身後名、不如即時一杯酒と、斯の如き人々は、只惟生前に歡樂を縱まゝにするの多からざるを憾むる耳、

『有生必有死、早終非命、促、昨暮同爲人、今旦在鬼錄、魂氣散何之、枯形寄』

空木、嬌兒索父啼、良友撫我哭、得、失、不復知、是非安能覺、千秋萬歲後、誰知榮與辱、但恨在世時、飲酒不得足』(一)

是に即て視きたれば、兆民居士の如きは命を知り命に安んずるの賢者と稱すべき歟、

然りと雖も、人は人なり、鬼神にも非ず、惡魔にも非ず、又無命無生の木石にも非ず、固より有生必有死とは覺悟しをるも、

『遂に往く道とはかねて知りつゝも』

昨日けふとは思はざりけり』

とは亦是れ人情なり、況や嬌兒索父啼、良友撫我哭を想像しては、吁嗟誰

宇 宙 觀

か潜然として涙下らざるを得んや、中江篤介君も心には泣けり、誰か左の一文を讀みて手巾を濕さる者あらんや、

四四

「五月二十六日堀内醫院に於て切開を施し了り、……毎日堀内院長診して、創口を療し、余は平臥動くこと無く、以て醫命に従へり、夫れ氣管切開術、小手術なるには相違なきも、手術は手術にして、其初や相當の痛を覺へ、爾後咳嗽する毎に、痰口より出でずして胸より出づ、而して聲音啞喝して些の反響なく僅に近接して談話を便するのみ、……氣管切開の事京阪間に傳へられてより、書翰日々輻輳して、手術後經過の狀を問ひ來る者には、余妻をして經過極めて良好なりと報せしむ、而して世人多くは痛腫に於ける氣管切開の何物たるを省せず、直ちに認めて根本的切開と爲し、更に書を發して大に祝賀し來る者比々皆是れなり、所謂一年中は唯余と妻と之を知るのみ、即ち東京來書中、二兒の葉書若くは封書有り、云ふ父上御病氣追々快復云々と、此處父親たる余に於ては聊かストイック的哲學の工夫を把りて自から防ざる可からず、人間も亦愚痴なる哉、呵々」

然り、其斯く「呵々」と笑ふ所却つて是れ最も傷心なる處、是れ所謂苦笑に

生死及靈魂無不滅問題

して、幾多の哀歌よりも更らに幾層の悲きを見ん、否、此一片の苦笑の裏面には實に萬斛の涙ある者とす、夫れ勇士は其首を喪ふを忘れず、軍人は屍を戰場に曝らすを覺悟す、殊に大勝利の中に陣亡戦死するウルフ將軍の如き尤も名譽とする所なり、然れども海軍大將ネルソンは大捷戦中に死するに當りてや、「天に謝す我は吾が職分を盡したれり」と呼はりながら、「嗟、痛の極めて劇しき我は實に死してあらんことを欲す」と叫びながらも、又低聲軍醫に語つて曰く、「然は云へ、人は今少し長くも亦生きたし」と、是亦人情なり、理は則ち喜び情は則ち悲む而已、倍是の如く、中江氏の覺悟は佳きは則ち佳しと雖も、其絶叫して「一年半も無なり、五十年百年も無なり、即ち我儕は是れ虚無海上の一虚舟」と曰ふに至りては、全く是れ純乎たる絶望の口調なり、決して安心立命の語に非ず、決して是れ満足の口氣にあらず、決して是れ甘心の言辭に非ず、孔夫子の所謂「朝聞道夕死可也」とは、其間に霄壤の懸隔ありて存するを認めずんばあらず、而して此の逕庭は専ら是れ「中江哲學」より胚胎し來

四五

れる者——耶非耶、

抑も涕涙は死を送るに尤宜き餞儀なり、如何となれば是れ親愛なる者の永訣なれば也、故郷を去る者は國境に臨んで涙丸瀾たり、海外に移る者は大洋に入るに當りて頻りに悲泣す、是れ人情なり、況んや顯幽處を隔つるの永遠別離に於てをや、然りと雖も、死其物は決して識者の怖れ避くべき者に非ず、如何となれば、殺々は即ち生々の最大要件なれば也、シヨペンハウエル曰く、

『死は箇人の終滅なりと自ら明言して諱まず、然れども此の死すべき箇人の中には一新人の萌芽ありて藏す、されば凡そ死ぬる者にして、永遠に死ぬる者は有らず、又都て生るゝ者も全く新らしき生命を受くるに非ず、

……是の如く今現に生きをる生物は皆後日將に生きんとする者の萌芽を悉く藏す、而して又凡て今盛んに生きつゝある者は皆吾人に向ひて斯く言ふに似たり、曰く、汝は何ぞ生者の必滅を哀くや、以前の生者にして若し逝かざりしならば、我等いかで世に出ることを得たらん乎と、

淮南子曰く、至人は天下を輕しとし、萬物を細とし、死生を齊しうし、變化を同じうすと、宜なる哉、死生を一齊視する是れ達人の達觀なり、生は彼より言へば死なり、死は此より言へば生なり、同一物を一方にては生とし、一方にては死とする也、シヨペンハウエル又此點に説を爲して曰く、『吾人が死して還る所の状態は是れ吾人が本原の状態な

り』と孔子曰自古皆有死と長生久視は天地の道に非る也
其到底免かる可らざる者を免かれんとするは癡愚何者
か之に若かんや然るに人情生を好んで死を憎み而して
竟に死を免かれ得ざるが爲に、一種の無常觀及び厭生的
悲觀を生じ來りたるも亦事實なり請ふ章を更へて少し
く本問題の此狀相を論ぜん、

第十七章 生死及靈魂有無不滅不減問題

物靈併行説と物靈合體論

天下に長生不死を冀がひて失敗したる者は豈只秦皇漢
武のみならん乎、淺く狭く考ふれば、是最も人生の恨事な
るが如し、縱や百載を全たうするも、死は遂に必ず來らん、
一休禪師の狂歌に曰く、

「人の身は脊戸のはたけの雪佛、

消えて残るはなのみなりけり、」

豈只「隴頭松柏半無主、地下白骨多於土」のみならんや、亦古
墳多是少年墓なるは永歎す可し、此の無常觀に乗じて佛
教は起れり、釋迦氏が無常を悲觀したるや至れり、盡せり、

宇 宙 觀

四門出遊の話は『亞細亞の光』となりて、天下に輝やけるに非ずや、

佛書に釋迦牟尼の出家せる由來を説きて曰く、

『一日悉陀太子苑園に到らんと欲し、車を走せて東門を出で、路に一老衰の人を見る、乃はち御人に問て云く、是は何人ぞや、身短小にして弱く、血肉乾涸し、頭髮白く、其齒落つ、只杖に依て僅かに歩むのみ、是何人ぞや、是唯其一家に限りて然るや、或は又是萬生の免れ難き命數なるや、御人答へて曰く、彼人は老衰せるなり、是即ち萬生必至の常期のみ、太子曰く、吁嗟生類何ぞ無知なるや、其少壯の美に心を奪はれて、之に誇る、是豈味劣愚癡の至りならずや、御者速に車を反せ、老衰を免れ難き此身を

生死及靈魂無不滅問題

以て、我豈快樂を追求む可んと、太子復一日遊園に到らんとして、西門を出で、路に於て熱に苦む病人に遭ふ、太子再び御者に問て、其實を知り、歎じて曰く、嗚呼身體の强健は唯夢の戯のみ、此畏可き形状を見る者誰か歡樂を思はんやと、其後太子復遊園に到らんとし、路にて死骸の布に覆はれて、運棺車の上に在り、親戚朋友の其傍に哭泣するを見、太息して曰く、痛しい哉、此世や、人唯暫く住まるのみ、若し老病死の苦なからむには、其樂み如何ぞや、我其還らむ哉、我當に解脱を得るの道を求む可きなりと、其後太子北門を出で、遊園に到らむとし、一の乞食を見る、即ち出家行者なり、其人逸樂を棄て、名利を離れ、嗜慾を去り、修行に凝りて、刻薄の生を度る、是は

宇 宙 觀

己に克んと務むるなり、太子曰く是れ即ち可なり、我將に世を遯れて、出家行者の生を度らん、然して始めて福徳望む可く、不老不死希ふ可き也と、是に於て其車を回らして城に歸る、

諸此の如く觀じ來るや、此の脆弱なる身體は實に頼むべからざる托生物と見ゆべければ、茲に此身を脱すべき道は頻に講ぜらるゝ事と成りぬ、例へば無常經に説ける如し、曰く、

『生者は皆死に歸す、容顏盡く衰變し、強力の者も疾病に侵さる、誠に斯を免るゝ者なし、妙高山須彌山も劫盡には散壞す、大海の深くして底なきも亦皆枯竭す可し、大地日月も時至らば、皆盡滅に歸せん、未だ曾て一事も無

生死及靈魂無有不滅問題

常に吞れざるは無し、上は非想處に生れ、下は轉輪王と作り、七寶を身に纏ひ、千子に圍繞せらるゝも、其壽命の盡る時至れば、須臾も停る能はず、還て死海の中に漂ひつゝ、縁に隨ひて衆苦を受け、三界の内に循環する事汲井輪の如し、亦蠶の繭を作り、絲を吐て還て自ら纏ふが如し、無上の諸世尊、獨覺聲聞衆すら、尚ほ無常の身を捨て、如何に況んや諸の凡夫をや、父母妻子、兄弟眷屬目に生死の隔を觀て、如何ぞ愁嘆せざらむや、是故に諸人に勸む、諦に眞實の法を聽き、共に無常の處を捨て、當に不死の門に行く可し、佛法は甘露の如く、熱を除いて、清涼を得さしむ、故に一心に善く聽て、諸煩惱を滅せんと務む可し、云々

宇 宙 觀

諸世間に三種の法あり、是皆愛す可らざる者、光澤ならざる者、念ず可らざる者なり、何者を三種の法と爲すや、老と病と死と是なり、汝諸比丘、此老病死は諸世間に於て實に不可愛、不光澤、不可念の法なり、實に皆意に稱はず、若し老病死世間に無んば、如來世に出て、衆生の爲に所證の法及び調伏の事を説くことあらじ、是故に汝ら知る可し、此老病死は最も厭ふ可き者、此三事の爲に如來世に出現す、外事の粧彩咸く壞滅に歸す、内身の衰變も亦然りとす、唯勝法のみ滅亡せず、諸有智人應に善く察す可し、此老病死皆共に嫌ふ可し、形儀醜惡にして極めて厭ふ可し、少年の容貌は暫時停るのみ、久からずして悉く咸な枯悴と爲る、假使壽命百歳に滿るも、終に無

生死及靈魂無不滅問題

常に逼らるゝを免かれず、老病死苦常に隨逐して恒に衆生の爲に不利を作す、云々
既に是の如く生老病死を以て人生の禍と爲したれば、又遂には开が所憑者(Sine qua non)たる人身を非常に嫌惡し、之を蛇蝎視する事とさへ成りゆきぬ、龍樹菩薩曰く、所有一切法、皆是老死相、終不見一法、離生死、有住と、又四十二章經に云く、佛言、觀天地、念無常、觀山川、念無常、觀萬物、形體豐熾、念無常、執心如此、得道疾矣と、殊に人身の事を視察するに、是最も常に無常にして、衆苦之本なりと云ふ、即ち法句經に云く、天下之苦、莫過有身、飢渴寒熱、忿怒驚怖、色慾怨禍、皆由於身、夫身者、衆苦之本、禍患之源と、又曰く、吾義縛着、生死不息、皆由于身、故欲離世、當求寂滅、

宇 宙 觀

：是最爲樂起信論にも亦言ふ世間一切有身悉皆不淨種種汚穢无一可樂と是を以て涅槃經に左の意を演ぶるあり、

『觀ずるに、此身は四大の毒蛇の如し、此身は無常にして、常に無量の諸蟲に噬食せらる、此身は臭穢にして貪欲に獄縛せらる、其畏る可きは死狗の如し、此身不淨にして九孔常に汚穢を流出す、是身は城の如し、血肉筋骨ありて皮其上を裹み、手足は敵を却くる樓櫓たり、目を孔竅と爲し、頭を殿堂と爲して、心王其中に處るなり、是の如き身城は諸佛世尊の棄捨する所の者にて、凡夫愚人の常に味着する所なり、貪淫嗔恚愚癡羅刹其中に止住す、是身の堅固ならざる事は、蘆葦、伊蘭、水沫、芭蕉之樹の

四興

生及死靈魂無不滅問題

如し、是身は無常にて念々に住まらず、猶電光暴水幻炎の如し、亦水に盡くに盡くに隨ふて滅合して片時も住まらざるに均し、是身の壞れ易きは河岸に生ひて深きに臨む大樹の如し、是身は久からぬ間に虎狼鴟梟鷲鶻餓狗の食ふ所となる可し、誰か智慧ある者此身を樂む可けん、假令牛の跡に大海の水を盛ることを能くするも、具さに此身の無常、不淨、臭穢等を説くを得ず、設使大地を圍めて小塊と爲し、漸々に小さくなして芥子の如く爲し、又は微塵の如くするも、具に此身の過患を説く可らず、此身をば涕唾の如く捨つ可し、

是の如くにして厭世教は成り立てり、解脱の道は天下に唱へられて、幾千萬の堂塔伽藍は毛立するに至りぬ、固よ

四七

宇 宙 觀

買

り此種の主義は餘りに極端に奔りて、人情に悖る甚だしければ、古來眞に與せる者は寥寥、晨星の如かりしと雖も、此の生を樂しまるゝだけ大いに樂しみて、尙榮啓期の覺悟に加ふるに、拾穗翁の精神を以てする事は、尤も必要なる者と謂はざる可らず、或る意味に於てや、此世は戰鬪場なり、勇戰奮闘を爲さざれば、生活すること難し、是有りと有ゆる物の進歩の法則なるを奈何せんや、然れども戰鬪する者は休まざる可らず、而して死は則ち形骸の安息なり、故に莊子曰く、大塊(造化)載我以形、勞我以生、逸我以老、息我以死、上に掲げたる列子の大化有、四説と参照せば、其言の意味深長なるを曉られん、然れば、列子が孔子の語に托して、死の安息を説ける

所實に興味の津々たる者あるを覺ゆ、其文を和解すれば左の如し、

『子貢學に倦んで、孔子に告て曰く、少しく息む所あらんを願ふ、孔子曰く、生ける間は息む所なし、子貢曰く、然らば賜(子貢)は竟に息むに處なき乎、孔子曰く、有り、夫の墳墓を望むに、累々突起す、彼處に至らば、則ち息む所あらん、子貢曰く、大なる乎哉、死や、君子も息み、小人も伏す、孔子曰く、賜や、汝悟れり、世人は皆生の樂きを知りて、未だ生の苦しきを知らず、老の懣るゝを知りて、未だ老の佚する所あるを知らず、死の惡きを知りて、未だ死の息む所あるを知らざる也、』

(註) 是れ最も著るしき達觀なりと謂ふべし、列禦寇は之を以て孔子の語と爲せり、或は然らん、或は然らざらん、勿論孔子は未知生焉、知死と(論語に)説き、又死者有知乎といふ子貢の問に答へて、非今之急と(家語に)言ひたれども、人生の戰鬪に疲れたる人に、死が安息の妙法なる

見

生死及靈魂無不滅問題

こゝは、或は之を夙に認めて明言したらんも得て知る可らず、如何となれば是決して來世に關する問答に非れば也、列子の此文頗る簡淨にして雄逸、以て朗誦す可し、今左に之を掲げて參照に供す、

子貢倦於學、告仲尼曰、願有所息、仲尼曰、生無所息、子貢曰、然則賜息無所乎、仲尼曰、有焉耳、望其壙、宰如也、宰如也、墳如也、鬲如也、則知所息矣、子貢曰、大哉死乎、君子息焉、小人伏焉、仲尼曰、賜、汝知之矣、人皆知生之樂、未知

生之苦、知老之憊、未知老之佚、知死之惡、未知死之息也、

但し死は斯の如く勞苦の終にして、老者の慶福なれども、死を觀るの高尙ならざる者は、動すれば放縱主義に流れんとす、古今其軌一なり、古代に在ては楊子の如き哲人専ら縱慾適意の生活法を鼓吹せり、楊朱曰く、『百年は壽命の大なる者なり、然れども百歳に達する者は千人に一人も無し、……人之生けるは奚をか爲すや、奚をか樂むや、曰

く美食厚衣の爲にする爾、聲音美色の爲にする爾、……萬物所異者、生也、所同者、死也、生則有賢愚貴人、所以異也、死則有臭腐消滅、是所同也、……十年亦死、百年亦死、仁聖亦死、凶愚亦死、生則堯舜、死則腐骨、生則桀紂、死則腐骨一矣、孰知其異、且趣當生、奚違死後、云々、是れ絶望の語にして、絶望の極や、自暴自棄に陥り、自暴自棄は遂に放情縱慾の淫佚豪飲に流る、天下比々皆然り、楊子は既に斯の如き見解を持せるが故に、伯夷叔齊を罵りて、清貞を衒ふの甚だしき者と爲せり、曰く、『清貞之誤善、在此』と、是れ孔子が伯夷叔齊は『仁を求めて仁を得たり、復何ぞ怨みんや』と斷言せる者と霄壤の差を呈すと謂ふ可し、勿論上にも論及せし如く、『孔聖盜跖同塵埃』なることは

如何にも杜甫の歌へる如くなれども、又絶粟斷穀以餓死する事は必ずしも夷齊を學ぶべきにも非ざれども、管仲が晏子に答へたりと稱する言の如きは楊朱のと均しく、餘りに太甚だしと謂ざる可らず、曰く生は唯「肆之而已」！勿論生を樂むは造化生々の旨に應ふる所以にして、毫も不可なしと雖ども、張季鷹の如く、使我有身後名、不如生前一杯酒と放吟し、白樂天の如く、莫思身外無窮事、且盡樽前有限盃と高歌するは、未だ中正の觀と稱す可らず、蓋し斯の如き放佚主義は多くは唯物觀より來る者とす、思らく此身や三尺息絶れば萬事休す、復死後に知覺す可き者なし、節制何の爲にかせんと、是れ純乎たる絶望的觀念なる乎哉、夫の『年壽有時而盡、榮樂止乎此身、二者必至之常期、未

若文章之無窮』と唱ふるは、魏の文帝の如き達識者に非れば、到底能はざらんとす、是に於て乎古來死てふ觀念には、死後の生命（無等）てふ觀念の相伴なふを禁ずる能はざりき、如何となれば上に説き來れる如き死は、所謂形體的死亡、physical deathにして、靈魂的死亡、spiritual deathに非ざるが故なり、既に絮述せる如く、身死は萬生に免れ難き者なれども、靈死は其有無を人類に限りて問ふ而已、先づ人身は、何々より成り立てるやと尋ぬるに、古來多くは魂神（精神列子に見えたり）と形骸との二物より成れりと信ぜらる、黃帝内經靈樞に曰く、黃帝其師岐伯に問て曰く、願はくは聞かん人の始めて生るゝや、何の氣之が基と爲り、何の者立て之が楯となり、何失なひて死に、何得て生くるや、岐伯曰く、母を

以て基と爲し、父を以て楯と爲す、而して神(精)を失へば死に、神を得れば生く、黃帝曰く、何者を稱して神と爲す、岐伯曰く、血氣已に和し、榮衛(精氣)已に通じ、五臟已に成るや、神氣心に舍り、魂魄畢く具はり、乃ち人と成る也、云々、此の神氣及び魂魄は即ち氣及び形にして、形體が由て活くる所以の物なり、神氣は一に又精神と稱す、五臟者所以藏精神魂魄者也、と黃帝の曰へるが如し(衛氣)此の魂神は何處より出で來れる耶、列子曰く、不生不滅なる根元より出で來り、身死するや其本に歸す、故に鬼と稱すと、善し然らば其魂靈なる者は形骸を離れて後獨立に存在するや、簡體を保ちて知覺を有する乎、何如ん、孔子は之を明言するを憚かれり、家語に曰く、

四四

『子貢問孔子曰、死者有知乎、將無知乎、孔子答曰、吾欲言死(者)之有知、恐孝子順孫妨生以送死、吾欲言死(者)之無知、恐不孝之子棄其親而不葬、賜不欲知死者有知與無知、非今之急、後自知之、』
又孔子は未知生焉知死を以て此種の質問を遮斷せり、否な實に此種の問題たるや、第一流の哲學者に於ても尙之を解答するを難んず、夫の大韓圖すらも正面より之を解説する能ずして、遂に法律上より所謂二律背反法(analytical)なる者を茲に借り用ひたり、二律背反とは元は二種の法律の相矛盾衝突する如き場合を謂ふ者にして、哲學上に於てや二箇の思想が正面よりは兩立し難き如き難問題を言ひ顯はせる者とす、カントの二律背反は都合四

四五

宇 宙 觀

箇ありて、該哲學者の大著『純理批判』中に粲然異彩を發てるを見る也、勿論此の矛盾法につきては種々なる議論ありと雖ども、兎に角眞神の在否、靈魂の存否等は一見甚だ證明するに難きを感じずんばならず、他の理由は言はずとも、哲學界の夫の巨匠カント其人が已に之を然か感じたるに稽がへて此事は察知せらる可し、只余輩はカントが其主張を貫徹せしむる能はずして、往々後哲の爲に非議せらるゝを憾むのみ(二律背反の何物なるかは左の註に見よ)

註 某氏スペンサルの不可識説を評駁するに方りて、傍らカントの該律に論及し、其無用の辯たるを指摘して曰く、
「スペンサルが所謂**臻極實體全不可識**てふ議論は、若し人を心服せしむべき力ありとせば、其力は凡てカントより出來れる者にして、ハミ

生 死 靈 魂 有 無 不 滅 減 問 題

ルトン等の手よりは何も益を獲たる所なし、却て損する所ありと謂ふべし、謂ふらく理性の性質上吾人は二箇の反對主張を信せざるを得ずと、スペンサル氏の本議論が力とする所は實に此にありて存す、カントの「アンチノミ」即ち二律背反なる者は都合四箇にして、吾人が世界の觀念を究る時に起る也、即ち第一は其題目には此世界は時間と空間とに於て限らると爲し、而して其反對には又等しく此世界は斯くの如く限られずと爲し、第二の「アンチノミ」は世界は單純なる部分を以て成立つと爲し、其反對は單純なる物質は一も存せずと爲すに在り、第三の「アンチノミ」は自由意志存在すと爲し、其反對は自由意志は存在せず、萬事萬端盡く必然の理法(天則)に循て起ると爲し、第四の「アンチノミ」は絶對的實體存在すと爲し、其反對は絶對的實體は何處にも存在せずと爲すなり、

凡てハミルトン、マンセル、スペンサル等の議論は全くカントの「アンチノミ」に本づきて起れるものなり、一たび此の模型を得ば製造は

宇 宙 觀

實際なく出来ん併ながら此に一疑問あり、是等の「アンチノミ」なる者は果して相互に矛盾するや否や、固より不可識論者輩は然りと答ふべし、然ども吾人もし矛盾する種々の主張を信すべくんば、理性は最早必要ならず、又理性は此上如何なる然諾を爲すとも信せられ能はざるべし、

想ふに是等の矛盾は只吾人が黙々の裏に宇宙には只一種の實在物あるのみと臆断する時に發する也、吾人もし宇宙には一種以上即ち許多の實在物存すと假定せば、其題目は此には眞なるべく、又其反對は彼處には眞なるあらん、必ずしも一箇に二様の觀あるには非じ、吾人もし物質的宇宙は時間と空間とに限られると云ひ、而して其限られざる者を宇宙に適用せずして時間と空間とに適用せば、其間に何の矛盾も存する事なし、蓋し時間と空間とは其上に又時間と空間とを立るに非れば、限られざる者とは思想しがたければなり、吾人もし世界は限られたる者、神は限られざる者と云ふとも、其間に何の撞

異

生 死 靈 魂 有 無 滅 不 滅 問 題

着もあるべからず、第二の「アンチノミ」につきても吾人は道理を以て其題目と其反對とを確言し得べし、即ち余は余自身の上にて於て此の二つを確言し得べし、——余は我なる者が生涯同一にして永存するを知覺す、——余は又吾身の動作、感情、思想等を知覺す、抑も「アンチノミ」の兩端は自覺の統一中に於て互ひに相補足する者とせば、理會せられん、又「アンチノミ」は凡て兩端の會合する處、若くは許多の特質が唯一つの物の性質を顯はす處に於ても、相互に一致して悖らじ、第三の「アンチノミ」は或物は有心的（ペルソナル）、或物は無心的（インペルソナル）なるが故に、或物は自由に、或物は不自由なりとの確言中に於て、其正解を發見す、自由及び必然は亦同一人物につきても斷言せられ得るなり、余は「アンチノミ」を斯く言顯はさんと欲す、曰く、余は吾身を束縛すべき自由を有つと、是即ち「アンチノミ」を一句に併合せるものにして、何人も之を以て眞とせざるは無けん、カントが第四の「アンチノミ」は絶對的眞體（眞神）の存在に係はる者にして、同時に一は之が存

異

宇 宙 觀

在を認め、一は之が存在を拒む者なるが、之につきては、余輩もし一方には絶對的なる者あり、一方には絶對的なる者に根柢する對待的なる者ありと斷定すれば、其矛盾は頓に消滅すべし、斯くの如く少しく常識を運用すれば、吾人は純理の「アンチノミ」の歴史を免かれ、更に進んで道理は其最も深奥なる確言に於て決して自ら欺かざるを見るを得ん、惟るにカントの「アンチノミ」より我々を救ひ出す所の理は、又我々をスペンサル氏の進退兩難中より救ひ出し得べし、』

但しカントは斯く一方に於ては二律背反法を以て有神觀、存靈觀等を一應否定したれども、他方に於ては實理批判中に在りて破壊の業を繰がへし、再び有神觀、存靈觀等を悉く道徳上より肯定し、以て建設の功を全たうしたり、是れ或は然のみ必要ならざる勞苦ならんも知る可らず

生死靈魂無不滅不問題

と雖ども、恰も孔明が南夷の孟獲を七たび放ちて七たび擒へたる如く、其力量は確かに天下の認むる所となれり、之を要するに、靈魂の存否は大凡四種の見地より論辯せられたり、唯物主義、唯靈主義、二元主義、一元主義是なり、唯物論者は勿論精神作用を悉く腦の活動に解し去るが故に、靈魂の存在を否む者とす、唯靈論者は讀んで字の如く全く唯物論者と正反對の意見を持す、謂らく形體は皆悉く靈魂の産物なりと、此等二種は共に極端にして、容易に與す可らず、之に反して二元觀は學術と常識の贊助を有して、其勢侮る可らず、一元觀は深遠の趣を帯びて往々人心を眩惑す、抑も二元觀 (Dualism, dualistic view) は即ち靈と物との併存

を認むる者にして、其信奉せらるゝ最も古く且最も廣き
や論を俟たざる也、支那に在て最も熱心に有神鬼(魂也)の説
を主張したるは墨子なるが如し、即ち曰く(前略)既以鬼神
有無之別、以爲不可不察已、然則吾爲明察此、其說將奈何而
可、子墨子曰、天下之所以察知有與無之道者、必以衆耳目之
實、知有與無爲儀者也、諸惑聞之見之、則必以爲無、若是何不
嘗入一鄉一里而問之、自古以及今、生民以來亦有嘗見鬼神
之物聞鬼神之聲、則鬼神何謂無乎、若莫聞莫見、則鬼神可謂
有乎、子墨子言曰、若以衆之所同見、與衆之所同聞、則若昔者
杜伯是也、云々、云々と縷々幾千言、甚だ勤めたりと謂ふべ
し、
朱子の如きは一種の准唯物的一元説を持したればか、靈

魂の存在を疑がひて曰く、

『必如此說、則其界限之廣狹、安頓之處、所必有可指言者、』

且自開關以來、積至于今、其重併積疊、計已無地之可容
矣、是又安有此理乎、』

其之を疑がふは可なれども、無地之可容とは、己れの胸を
以て宇宙を計る者にして、朱子にも似あはぬ固陋なる乎
哉、

同じ事にては朱子と相似たる(或點に於て)意見を持せるシヨ
ペンハウエルは今少し大きく之を論ぜり、即ち該失意哲
學者は斷言して曰く、

『按ずるに意識は意志に本づかずして、智力に本づき、隨
つて又機體に本づくが故に、意識は、恰も睡眠中及び氣

宇 宙 觀

絶中に於る如く、死後は滅絶し了らんこと疑を容れず、然し乍ら何ぞ憂へんや、吾人の意識は殆ど禽獸と伍すべき下劣の物に非ずや、吾人が死して入る所は大根本に歸没する者なれば寧ろ喜ぶべし、之を憂ふるは夫のグリーランド人が極樂に臚腑なしと聞きて極樂往生を拒むが如き而已[†]

何たる善罵ぞ、米國の大雄辯家ジョセフ・クック (Joseph Cook) 氏嘗て我國に來り、死すれば果して萬事休すやといふ演題を掲げて横濱に東京に幾度か演説したる事ありき、勿論开は嚮にポストン市に於てせる月曜講演の再演なりしかど、時と處に善く應ひて行りたれば、非常の喝采を博せり、其 Does Death end All? (死は一切の終なる乎) は生物学と題する三

器

生死靈魂無不滅問題

百頁の好書冊となりて世に行なはる、クック氏曰く、

『古代の希臘人にして若し今日の如き精巧なる顯微鏡を有したらんには、多分靈魂と形體との關係何如を論ずると彼が如く然か紛々たらざりしならん歟、該問題ハ彼等が哲學上に於る有名なる疑點にして、該國の哲學者等は頻りに論じて曰く、靈魂の形體に於るは、諧音の琴に於る如くなるや、又は榜手が船に於る如くなるやと、前者ならば死は勿論萬事の終ならん、後者ならば死は靈魂を滅ばさじ、ペリクレス時代の希臘人は未だ此の最近五十年間に科學が顯微鏡を以て探究したる如き結果を見ざりしかども、業に已に其大哲學者や大詩人は皆靈魂が形骸に於るは榜手が船に於る如しと

四五

主張せり、

斯てクック氏は一好喩を掲げて曰く、

『茲にナイアガラあり諸君は時に或は其大瀑布の表面を横ざりて一長虹橋の架せられたるを見ん此虹橋は何に由て起れるや諸君或は水なりと答へん余は之を駁して曰ん否然らずと試に思へ夫の水は常に搖きつゝあり而して夫の虹は毫も搖かざる也水若し之が原因たらば虹もまた同く搖かん然れども虹の搖かざるは開が原因の他に存する證據なりとす果して然り其水は虹を生ずるの機とはなりたれども原因は太陽に在て存す靈魂なる者が形體中に住して四肢百骸を活かすも亦是の如し』

此譬喩は卑近なりと雖も卑近なるだけ一般の衆庶に領會し易からん能く近く取て譬ふ是れ譬喩の妙なり、我輩は上に説けり物靈二元觀は科學と情理の贊助を受

宇 宙 觀

生及死靈魂無不滅問題

くとは是全く物と靈との科學的定義より來る者とす我輩嘗て之を論じて曰く『先づ物質とは何物ぞや物質は何を以て特性となすや俗諦上に於て之を言へば物質は有形を以て其本性と爲す延長を以て其屬性と爲す碍竄(不入)を以て其本質と爲す無生無命を以て其特色と爲す各元素の如く之を物質と稱す中江氏の所謂る物質或は元素は即ち是なり、次に靈とは何ぞや靈は何を以て特性とするや曰く積極的に之を説明すること最も難しとす靈は物質の反對なりと消極的に説くを以て最も便なりとす靈は有形なる者に非ず延長せず既に無形にして延長せざるが故に固より碍竄を性とせず而して又物質の如く無生無命なる

者に非ず、否、な、靈の靈たるは其活くるに在り、其活きて自ら動くに在りとす。故に自覺自活的なる者と稱す、而して此等の特色たるや、皆是れ生理學上心理學上に於て諸國の大學者が認め得たる所に係り、決して妄りに動し得べき者に非ず、之を一箇の體としては靈魂 (soul, Seele) と稱し、之を一般の作用としては精神 (mind, Geist) と稱す、但し此靈物畢竟是れ何物ぞやと云ふに至りては、全く別問題に屬す、此には只其必有を論ずる而已、舊唯物論者は謂れ無しに之を排せり、之が存在を否認せり、然れども近世の大家ロッセ (Lothe) は申すに及ばず、デュボア、レーモン (Du Bois Reimond) の如き、フョネル (Fechner)、ヴント (Wundt) の如き、大生理兼心理學者等悉く之が存在を確認するに至りぬ、

哭

勿論只妄りに口に唱ふることは何事にても極めて容易なり、石を豆腐の如く柔かしと云ひ、綿を金剛石の如く堅しと云ふも、實に易々たる事のみ、惟人々をして首肯せしむる能はざるを奈ともする無し、是れ何人にも其手を以て之が虚妄なるをを證驗し得るが故なり、精神と物質との區別を混同するも亦斯の如きのみ、只前者は形而下に屬するが故に觸覺六官の一を以て證驗せらるべく、後者は形而上に渉るが故に然か容易くは證驗し得られざるの差ある而已、之を要するに、物質を以て唯一實體となし、靈的作用を舉りて、悉く之を形骸の生理的變化及び生理的狀態と同一視せんとする舊式の唯物論は、今日の學術の面前に出れば、恰も熱湯を浴びたる霜雪の如く、太陽の光

哭

宇 宙 觀

に對せる幽靈の如く忽焉として消滅せずんばならず。是に由て之を觀れば、彼の滑稽家の言葉こそ實に千鈞の重を有する者にてあるなれ、或る人物質の何物たるやを問ふや、彼は直ちに之を排ぞけて曰く *Never mind*。或る人また靈の何物たるやを問ふや、同じく速かに之を遮りて曰く *No matter*。嗚呼滑稽洒落も茲に至りて千萬金の價ある者と謂べし、
諸靈と物とは學術上斯の如く劃然其性質を異にする者なるが故に、凡そ道理に率がひて議論せんと欲する者は、是非とも此等兩者の間に經界を立てずんばある可らず、既に斯の如く二種の判然別異なる物が果して人身に備はり、をるとせば、既に斯く靈と物と一身に備り、をるとせ

生及死靈魂無有不滅問題

ば、其關係は何如ん、是れ固より大問題なり、古來哲學者心理學者をして頭を痛めしめたる大疑問なり、今日の如く學術尙未だ完全ならざる世に於ては吾人此關係を知り明らむる能はず、故にラエホネル、ヴェントの如き諸大家（生理學と心理學とに精くして、殊に前者の如きは心理的生理學 *Psychophysics* を創設して物理的に心理を研究し始め、以て心理界に一新生面を開きし者なれども）も、彼の特殊にして妙絶奇絶なる心靈作用をば到底否認する能はずして、一方には舊式の獨斷的唯物論を排斥し、他方には一見甚だ窮したるが如き物靈併行説、精神活動と形體活動と兩々並行すてふ説を唱出せり、之を *parallelism* と名く、
此併行説こそ即ち是れ近時の心理界哲學界に一大波瀾

を捲き起したりし新説なりけれ實に吾人若し常識主義を去り、學理を按して進むに於ては勢ひ斯の如き折衷説を持ち出さざるを得ざるべし否な此事たるや哲學界に於ては決して珍らしき事にあらず、スピノザ (Spinoza) 已に二百年の昔に於て之を唱へたり、スピノザが唯一實體なる物 (Substance) を立て、之に思想と延長とを賦したるは即ち是れ哲學界に於ける物靈併行説に非ずして何ぞや、否スピノザが説の如きは寧ろ一元論 Monism, Monismus と稱すべけん、併行説は齊なり、一元論は魯なり、齊一たび變ぜば魯に至らん、然れども未だ道には至らざらん、哲學界に於て既に然りき、心理界に於ても安んぞ然らざらんや、果して心理學上にも一元論は興り來りぬ、

四一

之を要するに、此等の説の交も興れるは皆是れ舊式の唯物論が取るに足らざる者なることを證明する者とす、人身は決して唯物なるに非ず、否な天地世界其物も亦是れ唯物なるには非ず、換言すれば皆活物なり、死物に非ず、一元論の興るは決して偶然に非ず、勿論茲に余輩の所謂一元論はヘツケル (Haeckel) の主張せし如き、進化的唯物的一元論に非ず、余輩の所謂一元論は心理學上生理學上より歸納し來れる物靈合一的一元論を指す者とす、哲學界に於ては此種の主義を Identitätsphilosophie, philosophie of identity, identity philosophy と號す、シェリング (Schelling) 及びヘーゲル (Hegel) の哲學の如きを然か名くる也、
實に此の併行説と一元論とは兄弟なりとす、但し上に説

四二

宇 宙 觀

ける如く、物には物の特性あり、靈には靈の特性あるが故に、學理を尊重する人々は靈魂と形體との一致運動を説明するに困却し、遂にスピノザの擧に倣ひて、物靈併行説を唱へ出せり、是れ固より學理に忠なる所以にして、其精神は嘉尙すべし、決して彼の獨斷妄計科學の定理を無視するが如き放談高論者流の類と同日に論ずべき者に非ず、彼等併行論者(Parallelists)は大凡五種の主要なる故障を列ねて、物靈兩者の交互作用(Wechselwirkung, interaction)を否認し、随つて物靈併行説の正當なるを主張す、曰く物と靈とは全然反對の性質を有するが故に、靈精神感情等の類自ら物形骸腦髓神經等を動かす、又物自ら靈を動かすとは斷じて認むるを得ず、是れ學理科學の定理に悖れば也、

四四

生 死 及 靈 魂 有 無 不 滅 減 問 題

嗚呼何たる忠實の語ぞよ！學術にして靈あらば、必ず其學者的精神を感謝せん、按ずるに、併行説を主張する學者にも種々の區分ありて、哲學者と科學者の二派に大別せらる、スピノザの如きは前者に屬し、ヴント(Wundt)の如きは後者に屬す、勿論此等兩者の間には劃然たる經界の立てらるべき者に非ず、互に相出入する所ありと知る可し、偕近時に在て此説を持つせる者は獨逸に於ては(如何となれば獨逸)彼の物理的心理學者輩(Psychophysicists)を始めとして同臭味の心理學者等なりとす、即ちフエヒネル、ヴント、ランゲ、ハウルゼン等の諸氏を以て之が領袖とす、然し乍ら此の有名なる併行説の如きは何が故に物と靈との併行が生ずる乎を説明し

四五

宇 宙 觀

得ざる者にして、無知無識を以て根據とすと謂はざる可
らず、故にエルハルト(Erhard)氏の如きは極力此説を打破
らんと試みたり、否な之を辯駁して粗成功したる者多き
が如し、但し彼等は其中興の祖スピノザの如く、萬一の時
は退却すべき一元城を背後に有するが故に、其戰鬪力は中
々に強大なる者ある也、エルハルト氏思へらく、吾人若し
物質てふ者の觀念を一變し、カント、ライプニツ等の如く、
之を自活自動的なる妙力(mysterious force)と見做さば、物質
の情性上より生じ來る一切の困難は忽ち消え去らんと、
但しフヒネルは一方に併行説を唱へながら、他方に於て
は、上記の困難を避けんと百方工夫しつ、遂に物靈兩者の
共同根本たるべき未知の現體なる者を立て、説を爲して

異

生死及靈魂無不滅問題

曰く、千差萬別なる箇人の心識は或る總一心識の波瀾な
る而已と、斯く彼は千萬靈波の根本たるべき唯一無二の
大靈海を裏面に立てたり、但し情性なる物質は之を奈何
せんとする乎、是に於てフヒネルは夫の有名なる説明法
を按出したたり、曰く、同一箇の曲線(圓球の面)も外より視れば
凸狀にして、内より視れば凹狀なり、此の如く、腦作用も亦
内より之を視ると外より之を見るときは、全く其趣を異に
すと、此の説明一時は其斬新なるを以て稱せられたれど
も、今日は早や陳腐なる一詭辯と見做るゝに至れり、如何
となれば、腦の如きは如何に之を視るも、内より觀るも外
より觀るも、依然として腦たり、物質たり、其働は純乎とし
て生理的のみ、決して思想若くは觀念と同一視すべき者

畢

守 宙 觀

に非ず、且又此二様の觀(同體異觀)は誰が然か二様に觀ず
るぞよ、其觀視の主たる者は誰ぞ、一元論者多くは言ふ其
生理的行歩即ち是なりと！凡そ此の如き事は口言ふべく
して、心には正當に思惟す可らざる者とす、然れども此等
擅言濫語中に、自然と一種の眞理は籠りて見ゆ、他なし、一種
の不測幽渺なる者ありて、人身に存在すとの事實是なり、
其何物なるかは斯の如く議論紛々たるにもせよ、事實は
依然たり、此の四股百骸を指して形體と謂はば、彼の虛靈
不昧なる者を指して靈魂と謂ふも何の不可か之れ有ら
んや、

(註) 夫の三十餘年前に於て支那に成れる靈魂篇の如きは支那人に
靈魂精神等の件を教ふるに與かりて太いに力ありしと云ふ者なる
が、我が明治の初に於ても亦同様の効果を日本帝國に呈したり、其説

四六

生 死 及 靈 魂 有 無 不 滅 問 題

く所明快、今尙一讀の値ありと謂ふべし、其一節に曰く、

「一、靈者靈動知覺之謂也。魂是靈所附麗、靈是魂之妙用、合而言之曰靈
魂。夫喜怒哀懼愛惡欲、靈魂之所流露也。仁義禮智信、靈魂之所發見也。
即疾痛癢癢之最微者、無不知覺、亦靈魂之所主持也。是靈魂乃人身之
主宰、實即各人無形之本己也。」

二、靈魂具於吾身、無迹像之可求、非若天下有形有質之物、可以量度、夫
有形質者、皆歸於盡、故物無不滅、無迹像者、久而常存、故靈無或死、靈也
者、至精至粹、至貞至久、無消沒之謂也。

三、俗說靈魂與人之精神相似、不知精神是人之精力、於勞瘁疾病之時
精力頓失、不能治事、甚至坐立不安、止堪坦臥、試問其痛癢、而彼答之、歷
歷不爽、若果精神即是靈魂、當茲坦臥、精神將歸、烏有誰能知有痛癢、可
見精神是精神、之可以復元、而靈魂無時不在、主持動靜、不得與精神
相渾也、至於禽獸、雖有動靜知覺、不得謂亦有靈魂、蓋禽獸只知飲食而
已、而焉能辨善惡是非乎、故凡物之附於其本而生者、本亡則附者亦與

四七

之俱亡。若靈魂非由於身之本質而生。亦非依附身體。而與本質為渾一。世有氣聚則生。氣散則死之說。大抵指精力言之。非指靈魂言之也。由是而觀。人有略與物類相同者。精力之盛衰是也。其與物類大異者。靈魂之賦。卑是也。

四。靈魂之有。不先於身。胚胎既成。斯靈即具。一人然。萬人亦然。

五。靈魂為我身體之主宰。蓋身體塊然一物。無自主之權。一切動靜起居。視聽言行。俱為靈魂所驅使也。試思身體所最忌者。莫若捐軀殺身之事。乃舍生取義之人。往往不顧刑罰。不惜身體。以自成其志。士仁人。貞女烈婦。又身體所最便者。莫如安逸。乃至於爭名奪利。往往冒矢石。而不懼歷跋涉。而彌甘。此豈身體所愛。而願為此乎。亦曰。一入其場。身不自主。惟我心之靈魂主之耳。且耳目口鼻。我身之形體也。必藉靈魂歸之。斯不入於錯誤。譬如山谷中大聲一呼。忽聞羣峰齊答。聞之者耳。而知其為應響者。靈魂也。臨池觀玩。忽見星月墜池。見之者目。而知其為倒影者。靈魂也。人患熱病。甘物皆苦。人若傷風。香氣不聞。而知其味之鹹甘。氣之鹹香者。非

口鼻之功。實靈魂主之也。由是觀之。是魂為身體之主宰也。益信。」

此の如く既に靈妙不測なる實在物吾人に在りとの事實を認むとせば、實に是れ魯なり、魯一變せば、或は道に到らん乎哉、如何となれば、ヴンデルバンド (Windelband) が言へる如く、人若し此の見解を推擴めなば、遂には眞神に於ける一統普遍的總妙靈覺に溯洄するに至るべくして、衆原分子の宇宙に遍ねき離合集散は悉く之を以て根本とすと謂ふべしと、「カントに歸れ、カントに歸れ」との警語は

此變の消息を漏せる者と謂つ可けん、
但し此靈物は然らば何を以て體とする耶、其不見なるを以て往々學者之をエーテル (ether, aether) に比し、或は之をエーテルと同一視す、リ、コントの如き、ウルリチの如き是

宇 宙 觀

なり、例のヘッケルは飽までも其唯物主義を貫ぬかんと欲してか、宇宙エーテルを以て能造の神(造化)と爲したり、但し不見無重 (invisible and without weight) といふと雖も、エーテルも亦物質のみ、靈物は即ち靈なる物なりと告白するの愈よれるには若かざる也(上に掲げたる never hid 及び no matter の滑稽を參看せよ)、最後に人或は問ん、然らば此靈魂なる者は滅盡する乎否や、請ふ其説を聽かんと、是れ最大難問なり、前に論じたる死は形骸の死なり、物質的死亡のみ、之を physical death と稱す、今此に所謂死は靈魂の死にして、靈的死亡なり、之を spiritual death と稱す、悪人の靈魂未來に死する之を聖書には第二の死 (second death) と呼べり、基督曰く「形體を殺して靈魂を殺し得ざる者を懼るゝ勿れ」と、實に靈魂の不滅は

生及死靈魂無不滅問題

古來徧く天下諸國に信ぜられてありき、上古の埃及人は一種の輪廻説を信じたり、靈體不死ならずば、焉んぞ輪廻の事あらん乎、上古の希臘人然り、上古の支那人然り、上古の印度人然り、各國の土人然り、但し此に一つ注意すべき事ありと云ふは他なし、古來普通に所謂靈魂の不死 (the immortality of the soul, Unsterblichkeit der Seele) は唯神魂の死せざるを謂ふのみならず、又箇人の箇性が箇人たる意識を以て死後に活存生續するを謂ふ者とす、此點に留意せざる靈魂不滅説は是れ一種の涅槃寂滅説にして、其逕庭や大なりと謂はざる可らず、ゲーテ曰く、

「我や未來の生命(生來)を疑はん事に於ては世界中蓋し最後の人たらん歟、否、我はロレンゾの如く自ら敢て言ん

とす、之を信ぜざる者は、今生に於てすらも既に已に死したる者なりと、我は堅く信ず吾人の靈魂は不滅性の存在を有し、其働や永遠より永遠に至ること、恰も太陽の如し、毎夕没すとは見ゆれども、其實は萬古不易なる光榮を以て永遠に輝きつゝある者とす、

フエヒネル自身も亦『死後の生命』Leben nach dem Todeと題する小冊子を著はして、此問題を論じたり、曰く、

『人類は地上に只一たび生くるに非ず、三たび生くるなり、第一期の生は續いて睡る也、第二期の生は交も睡り且醒むる也、第三期の生は永遠に醒むる也、』

『死者の靈魂は生者の精神上へ不斷の感化を及ぼす者なれど、吾人は此の第三期の靈魂を知覺すべき微妙の

耳目なきを憾む而已、』

『視よ、茲に驚歎すべき賞罰の宇宙に徧く行はるるあるぞかし、勿論外部の賞譽苛責の在るには非ず、然れども一たび死するや萬事既に休むに非ず、又靈魂の波瀾宇宙の大洋裏に没入したるにも非ず、然れば吾人は起て働かざる可らず、如何となれば此世にて步趨遅々たる者は彼處(生)にて跛行せざる可らざれば也、』

嗚呼箇々の靈魂の不滅及び死後の賞罰を説ける、何者か是より明晰なる者あらんや、然し乍ら段々讀み以て行けばフエヒネルの所謂死後の生命は偉人豪傑が身後に留むる芳名及び感化力に歸し去るを見ん、此の如くんばヒーシオド(Hesiod)が三千年の昔に已に英傑の靈を地上に

宇 宙 觀

於ける人間の擁護者と讃稱したると何ぞ異ならん乎此種の説は近頃往々耳朶に觸るゝ者にして夫の時に或は靈魂の不滅を信ずる如き口氣をなせるトルストイ伯さへも一種の餘德遺風的靈魂不滅説を唱へたる如し實に伯が死後の生命を語る所往々讀者をして去就に惑はしめんとす例へば其「主と僕」てふ小説の終に臨みて伯は夫の主（僕の名）に死（僕の名）おくれたるニキタ（僕の名）をして己れも凍死せる主（僕の名）アンドレチの後を追ふて同じく凍死すべくやと恐れつ、叫ばしむらく、

「バチウシカ（天帝たる主）！主は必ず吾を召したまはん、主の御旨は成れかし！とは云へ是は幸し然し乍ら人は二度死ぬ能はず、一度だけは死なねばならぬ、嗚呼迎も死ぬならば早かれよ！」××××

生及靈魂無不滅問題

伯は遂に該僕御の終焉を叙べて曰く、

「此後彼は幸ひに尙二十年も如何はしく生き存らへつ僅かに今年、其平素の望どほり幾多の聖像の下に燃る二挺の蠟燭を兩手に、永眠をぞ爲したりける、××××彼は此死の後醒覺たらん處にて、幸福なりしか、不幸なりしか、彼は僧徒に欺むかれし乎、但しは正（まこと）に其待まうけたる物を彼處（死後）に得し乎、我々皆遠からず此事を味ひ知らん」

然りと雖も、靈魂の不滅は天帝の存在と間接に關聯し、人類の本能（天性）と直接に係涉し、物力保存の理に基づき、道徳倫理の法に照して（トカン）、或は深く或は淺く推斷計量せらる可ければ、唯物的中江哲學（トカン）の如きは最早橫行するに餘地なからんとす、兎に角或る種類の不滅觀は到る處に主張せらる、只其不滅たる或は一滴の水の大海に没する如けん乎、或は蛹（まご）の一變して蝴蝶と化する如けん乎、是れ

宇 宙 觀

問題なりとす、佛教は勿論其究竟觀としてや前説を執れり、而して之を寂滅と名く、之に反して基督教は其普通觀としてや後説を執れり、前者は人情に反し、後者は人情に適ふ、人情に適ふは即ち人類の本能良知に順がふが故なり、上に論及したる演説中に於てジョセフ、クック氏は本能の根柢甚だ深き者なるを説けり、如何となれば造物は決して無用の機能を動物に賦與せざれば也、鳥獸の本能は皆それく其用あり、人類の本能獨り無用虚妄なる者ならんや、——前者は心識を以て無明の凝結體となし、後者は人間を以て物靈の合體物となす、後者は實に亦是れ萬學の祖アリストートルが夙に執持せし卓見なりしと思はる、彼が所謂 *entelechie* 亦是れ此種の妙體なる哉、獨逸現

生死及靈魂無不滅問題

今の哲學者輩は鼠競戲的に屋上屋を架し來れるに倦みつ、處々に叫びて曰く、『韓圖に歸らん乎哉』、『韓圖に歸らん乎哉』と、佛哲マビルヨウ氏(Mabilleau)は其原分子的哲學論(Histoire de la Philosophie Atomistique) 中に大呼して曰く、『ライブニツに歸れよ』、『ライブニツに歸らん乎哉』と、余輩は百尺の竿頭更に幾歩を進めて殆んど言はんと欲す、『アリストルに歸れ、ペリパテチク哲學に歸れよ!』と、是れ眞理はいづも中道に在りと知れば也。

第十八章 厭生主義と樂天主義

四〇

悲觀と喜觀との調和

此の世界を以て完全圓滿の福樂境と爲す、是れ所謂樂天主義なり、此の世界を以て不完全極まる苦患境と爲す、是れ所謂厭生主義なり、而して此等兩觀は或は主觀的に起り、或は客觀的に起り、固より一を以て律す可らずと雖も、世の中が禍福善惡若盤目然と相交錯しをることは之に由て推知す可し、ヴナルテールが其小説『カンヂド』を以て巧みに描き出せるが如く、一たび華族の御姫様の戀人とならんとするや、忽ち放逐せられて流浪の身と成り、再び立身出世の緒開くるや、瞬く間に鐵窓の下に呻吟する體

宇 宙 觀

厭生主義と樂天主義

と成るなど、一喜一憂、一禍一福、續々手の裏を反すよりも速かなる、是れ寧ろ人生の常なるに似たり、是に於て乎前章に引けるシヨペンハウエルの如く厭生的觀察を爲す者あるに至る也、
天地の徳を生と謂ふ、萬物は、生々して止まず、然るにスピノザの如き哲人は群生相吞噬する弱肉強食の狀態を魚介昆蟲及び禽獸の上に認めて、絶叫せんと欲す、殺々、死々、是れ天地の法なる乎哉と、
然し乍ら退いて熟ら考ふれば、其所謂、死々、殺々は、即ち生々、活々する所以の方法にして、天徳は依然として無限の大愛なること露ばかりも疑がふ可らざるが如し、エマールソンは思慮深遂智慧卓越なる賢哲なりしが、口を開く

宇 宙 觀

や必ず頻りに造化の盛愛を唱説し、天帝攝理の妙恵を歎美せり、碩學ライプニツ亦然りき、大詩人ミルトン然りき、
ポーブ然りき、上に既に譯出せしリグ、ヴェダ(印度古典)の天地開闢説は愛を以て萬物の種子と説き、倣せり、基督曰く「天帝は愛なり」(God is Love)と、而して此の愛徳は萬物生々の上に顯著なるが故に、支那の聖賢は天徳を生と曰ふと斷言せり、然れば佛教の祖たる維陀經にも、基督の福音たる聖書にも、均しく愛が萬物の根本たり、或は天地の大徳たるを説ける也、而して是又全く事實に基ぬす、某氏嘗て愛の理を講究して頗る詳悉なる者あり、以て参考の材と爲す可し、其論に曰く、

「愛は人性に具はる所の情なり、想ふに人皆その心に愛情の有ることを

厭生主義と樂樂主義

知るならん如何なる殘忍の人たるも此愛情を具へざるはあらざるなり、但し其愛情は偏に愛と曰ふと雖ども、其向ひて發する所の事物に依りて自ら其類を異にするあり、例へば花月を愛するは風流の愛にして、貨財を愛するは利慾の愛なるが如し、既に是の如くなれば愛の中にも善惡の別あるべし、然れども是れは唯愛の用に就て言ふ而已、愛の體たる唯一なり、獨逸の大詩人ゲーテの詩に云く、

「群書中の奇書と稱す可きは愛情の書なり、余心を専にし意を用ひて之を讀み、味ふに、其數葉は歡喜快樂の事にして、其全部は悲歎愛悶の事のみ、離別その一段を倣し、再會その一章をなす、」

又英國の詩人にて、其名聲ゲーテよりも高かるシエクスピールの歌に云ふあり、

「愛情は歎息の氣に由て生ずる所の激動なり、之を怒らすれば眼中火燃出で、之を苦むれば涙の海、水まさる、是豈他ならんや、忿怒怨恨および馨香たる耳、」

宇 宙 観

又獨逸の有名なる文學家デラモット、フーケイの語に云く、

「人の心の奥底に至^シ淨らかなる美はしき一間の室あり、眞實の深き者ならでは之れを伺ひ知ること能はず、其室の名は愁の中の樂といひて、隱語にさも似たるが、是なん愛情といふ者なりける、」

偕此三人が斯く詠み残したる其愛は何の愛なるやと云ふに、是は勿論男女の愛を指せる者なり、禮記には飲食男女人之大慾存焉とあり、又亞聖孟子の語には丈夫生而願爲之有室、女子生而願爲之有家と有りて、皆この男女の愛が天性なるを謂へり、素性法師が

「おとにのみさくのしらつゆよるはおきて

ひるはおもひにあへずけぬべし」

と詠み、久米禪師が石川の郎女に通ひて、

「あづまとののさきのはなののをにも

いもがこころにのりにけるかも」

と打戯むれけるも、此愛情の發したるもの也、又茅刈の謠曲に難波人が

厭 生 主 義 と 樂 天 主 義

夫婦再會して語らへる詞を左の如く記せるあり、

「實に難波津淺香山の道は夫婦の媒妁なれば然のみ何をか包み居の隠れてすめる小屋の戸を押あけて出ながら面無の吾姿や三年の過しは夢なれや現世に逢ふの松原かや木蔭にまとひして難波の昔語らん夫高き山深き海妹背戀路の跡ながら殊に難波の海山の世に類なき情とかやあるは男山の昔を思ひ出で女郎花の一ときをくねるといへども言慰むることの葉の露もたわゝに秋萩の元の契りの消かへりつれなかりける命かな然ればいか程に衰へて身をはづかしの森なれども詞の花こそ便なれ」

此美しき言詞は其愛情より出でたる花とも見る可き歟、又かの宮女が柳色參差掩畫樓曉鶯啼送滿宮愁、年年花落無人見、空逐春泉出御溝、と怨するも、此情より出るなり、又蘇武が匈奴に使用する時其妻に留別せる辭に、

「結髮爲夫妻、恩愛兩不疑、歡娛在今夕、燕婉及良時、征夫懷往路、起視夜何

宇 宙 觀

其、參辰皆已沒、去、去、從此辭、行役在戰場、相見未有期、握手一長歎、淚爲生別滋、努力愛看花、莫忘歡樂時、生當復來歸、死當長相思、
とあるも、此愛の外ならざるなり、但し愛の種類は此に盡す、此外に向ありて、其重なる者は人類を愛するの愛なり、夫の所謂仁徳は即ち此の愛の事なるべしと思はる、然ばにや朱子は仁者愛之、理心之徳なりと云ひ、韓退之は博愛之謂仁と説けり、又孔子は哀公に對へて仁者人也、親親爲大と言りと傳ふ、是を以て仁と愛とを合して仁愛と云ふなり、然れば國人のために己の身を犠牲とするものは、此愛を全うする者と云ふ可き歟、斯の如き人は身を殺して仁を成すものなれば也、
次にまた自身を愛する愛あり、之を呼て自愛の情と云ふ、又親戚親子兄弟の如き者相愛するの愛あり、又此世を愛するの愛あり、此の世を愛すとは此世界に萬々年も生き存らへ居らんと深く願ふを謂ふなり、又名聞を愛するの愛あり、最後に又神明即ち造物主宰の天帝を愛するの愛あり、神明を愛する事は蘇國の學者フレイミング氏が其著はされたる倫

厭 生 主 義 と 樂 天 主 義

理學に言へる如し、云く
「恩惠は人をして愛心を起さしむる者なり、即ち人恩惠を蒙むれば、之に感じて其恩惠の主を愛するに至る、是れ自然の理にして、又當然の事なり、凡て恩徳仁恵に感ぜざる者は、人性の情に缺くる所ありと謂ふべし、若し人間の幸福を増んとして、熱心に力を盡す者あるときは、人之を尊敬するを常とす、而して己れ自ら其幸福を享受するに及ぶ時は、只之れを尊敬する而已ならず、又深く之を愛敬し、感恩と愛慕の情心中に切なるに至る、然らば我等の如き人類は、其造物主なる天帝に對ひては、殊に深く感恩愛慕の情を懐かざるを得ず、凡て造物主の爲したまふ事は皆其至大の恩惠を顯はす者にて、我等人類は皆其仁澤に沐浴すれば、宜しく然ある可きなり、
然ばにや舊約復傳律例書第六章五節には曰ふ、
「汝心を盡し意を盡し精神を盡して汝の神エホバを愛すべし、」
基督此の語を引て人に答へたる事ありき、

宇 宙 觀

夫れ愛の種類は是の如く許多ありと雖ども前にも説る如く是れは唯其用の異なるを謂ふものにて、愛の體たる始終一なり、之を譬ふるに猶一の口を以て飲むことを爲し、食ふことを爲し、吐くことを爲し、罵ることを爲すが如し、口の用たる是の如く種々あれども、其體たる一なり、楮此愛情と云ふものは善なる者か、惡なる者か、人に害あるか、人に利あるか、其事如何、

兪

先づ支那聖賢の説く所を見るに、大抵愛を以て善なる者となし、人に利あるものとなせり、彼の孔夫子の如きは、恒に仁徳を人に勸めて倦ざりき、又孟子は仁義を口に稱へて、戦國の中を往來せり、孔子の曰く、人而不仁、如禮何、人而不仁、如樂何、又曰く、君子去仁、惡乎成名、君子無終身之間違仁、造次必於是、顛沛必於是、是仁徳の須臾も缺くべからざるを示せる者なり、又孟子が梁の惠王に見えたる時、更不遠千里而來、亦將有以利吾國乎と言はれたるに、孟子對て曰ふ、王何必曰利、亦有仁義而已矣、云々、未有仁而遺其親者也、未有義而後其君者也、王亦曰仁義而已矣、何必

厭 生 主 義 と 樂 天 主 義

曰利と、斯の如く答へたり、孔孟二氏已に然り、其後に從ふ門弟子及び儒者等は言ふまでもなく皆仁義を主張する者と知るべし、此所謂仁は仁愛の事にして、汎愛の義なる者たるは、前に陳し如くなり、但し仁と愛とは其名少く異なり、今又その愛を熱心に宣へ傳へたる者を漢土の聖賢の中に索むるに、其人なきに非ず、墨子即ち其人なり、墨子は恒に兼愛の事を勸め、書を著はして其説を後世に傳へたり、案するに其兼愛は即ち博愛と異ならざるが如し、然るに孟子は深く墨子の説を嫌ひ、一度までも其書中に之を排斥せり、孟子曰く、聖王不作、諸侯放恣、處士橫議、楊朱墨翟之言盈天下、云々、楊氏爲我、是無君也、墨氏兼愛、是無父也、無父無君、是禽獸也、是の如く墨子を罵れり、然れども墨子の語を見れば、孟子の此詞の誤れること一目に瞭然たり、

墨子は事を論ずるに當ては丁寧反復して其理を説示すが故に、其説の本意を解すること誠に易し、墨子は兼愛を主張せしが、其兼愛は別愛と反對する者にして、其義博愛と相類す、兼愛と博愛との間に差別あるを

兪

見ざるなり、墨子の曰く、

「聖人以治天下爲事者也、必知亂之所自起、焉能治之、云々、譬之如醫之攻人之疾者然、云々、不可不察、亂之所自起、亂何自起、起不相愛、臣子之不孝、君父、所謂亂也、子自愛不愛父、故虧父而自利、云々、雖至天下之爲盜賊者、亦然、盜愛其室不愛其異室、故竊異室以利其室、賊愛其身不愛人、故賊人以利其身、此何也、皆起不相愛、云々、

「若使天下兼相愛人、若愛其身、焉施不孝、云々、故視人之室若其室、誰竊視人之身、若其身、誰賊、云々、若使天下兼相愛國、與國不相攻、家與家不相亂、盜賊無有、君臣父子皆能孝慈、若此、則天下治、云々、焉得不禁惡而勸愛、故天下兼相愛則治、相惡則亂、故子墨子曰、不可以不勸愛人者、此也、」

墨子が主張する此愛は孔子の所謂仁と同じき者にして、共に人類相愛するの愛を謂ふなり、彼男女の愛の如きは固より此中に合入せざるなり、墨子の此愛と孔子の所謂仁と同一なる事は、左に掲ぐる墨子の語を見、又前に引たる仁字の解釋を見れば明かならん、墨子曰く、

「天下之人皆不相愛、強必執弱、富必侮貧、貴必傲賤、詐必欺愚、凡天下禍篡、怨恨、其所以起者、以不相愛生也、是以仁者非之、既以非之、何以易之、子墨子曰、以兼相愛交相利之法易之、然則兼相愛交相利之法將奈何哉、子墨子曰、言視人之國若視己國、云々、

孔子が己之所不欲、勿施于人と言ひたるも、此兼愛の道たる而已、斯の如く、漢土の聖賢は皆愛の大切なることを説かれたり、但し是れは前に言へる如く、人類相愛するの愛を指せる者にして、男女の愛は此中にあらず、然れども男女即ち夫婦は五倫の一にして、固より不可なるものにあらず、されば、聖賢之を着て善となせしこと、明かなり、前に引たる禮記には、飲食男女は人之大慾存焉とあり、且又聖賢皆妻を娶りたれども、唯事の秘すべきを思ひて、中節の事不可言としたる而已、毛詩に云く、

「關關雎鳩、在河之洲、窈窕淑女、君子好逑、參差荇菜、左右流之、窈窕淑女、寤寐求之、求之不得、寤寐思服、悠哉悠哉、輾轉反側、云々、

孔子此詩を評論して曰ふ、關雎樂而不淫、哀而不傷と、匡衡又之を敷衍し

て曰く配匹之際生民之始萬福之原婚姻之禮正然後品物遂而天命全孔子論詩以關雎爲始云々と此關雎の詩は文王が后妃に對するの情を歌る者なるが后妃は亦自ら左の如く其思情を述らる、

「采采卷耳不盈頃筐嗟我懷人實彼周行」

文王夫婦是の如く相愛しければ文王之化自家而國男女以正結婚以時と稱す孟子亦曰ふあり、

昔者大王好色愛厥妃詩云古公亶父朝來走馬率西水滸至于岐山爰及姜女聿來胥宇當此時也内無怨女外無曠夫」

歐米諸國の賢者が言ふ所何如ん、

西人の中に愛の理を説る者甚だ多し而して其中には愛を非とする者殆希なり米國の碩學マークホプキン氏の如きは別に一書を著はして愛の理を論じ愛を以て天地の法と爲せりイナランドの曰く、

「天地の理を崇とべ愛の牽く所に従がへ然せば汝は律法を要する無し」

此言はホプキン氏の如く愛を以て天地の理となし之に則とるを以て善と爲せる者なり又グリップルバルセル氏は愛の徳を述て左の語をなせり、

「日輪の金光は黒雲を轉じて金とならしむ愛の物を感化するも亦是の如し愛は其氣息に觸るゝ者を感化して之を貴くす是即ち愛の幻化力なり」

エルンストシユルツェ氏も亦愛の徳を述て云ふ、

「樂は常に明るき處にて光を發つ而已然ども愛は暗き處にても亦香氣を放つ」

是愛は歡樂の時にも憂患の時にも共に其性質を變せざる美德なるを謂ふ者とす、

借愛は是の如く貴き者なればにやチエク氏は萬事を損するも忍ぶべけれど愛を失ふては忍び難しと説きぬ即ち云ふ

「人は朋友に棄られ世に棄らるゝも尙其慘愴を感ずるに於ては寥か

吾
 らず、其燃たつ憂愁を悲しみて冷し、其失なひし者の形像を心に念ひ
 見る時は、過去は嬰孩の如くに己の傍に尙遊び戯むれ、未來は己の前
 に明鏡を掲ぐるなり斯る人は、慘憺と涕淚を友となし、心靜かに慕ひ
 暮し、念ひ明して樂おのづから其中にあるべし、然れども若し思ひ違
 等よりして我身より愛を失ひたりと心に感ずることあらば、其時こ
 そ人は深く悶え惱まざる可らず、己の故郷をも立ち去らんとす、
 此人の語によれば愛の失ひがたきこと、是の如く甚だし、但し此に謂る
 者は専ら男女の愛を指すが如く見ゆ、然ども愛の體は皆同一なれば
 彼此並べ擧るも妨なしと思はる、是の如く愛の失ひがたき者なる事は
 諸國の稗史小説淨瑠璃詩歌等の上に明かに見えて争ふべからざる事
 たり、彼の朝顔が熊澤治郎左衛門を慕ひて東國に下り終に目を泣つふ
 して尙之を尋ねしと傳ふるは、此チエク氏の言る所を實地に顯はした
 る者なり、
 偕是の如く愛は棄がたき者にして、愛の爲には此身も命も惜からぬ者

なるが故に、愛は屢艱難の種となり、人をして之がために歎息せしむる
 事あり、是を以てフランスの小説家ドマは其著はせる「王妃の頸玉」とい
 ふ小説の中に一婦人をして「嗚呼、愛情は愛悶の尺度なる哉」と歎息せし
 めたり、一方より見る時は此事誠に然り、是は亦初に引たるゲエテの語
 にも見ゆ、然ども此諸子の説によれば、是事は即ち愛の貴き事を證する
 者にして、決して之を損する者にあらずと云ふ、譬へば金銀の爲に生命
 を捨る人間々あるが如し、人金銀の爲に生命を捨ればとて、金銀は悪き
 物にあらず、却て之が爲に其貴きことの顯はるゝなり、且又愛の爲にす
 る艱難辛苦は其實艱難辛苦にあらずして、一種の快樂たり、シエクスピ
 アール善く此事を説けり、
 「寔に別離といふ者は悲しくも、亦美はしくも思はるゝ者なるよな、然
 るからに此身は明る日まで諸了君安かれとも言得ざりき、」
 是即ち別離の愁は一種特別なる者にして、偏に愁とのみ名く可らざる
 を云ふなり、シルレルの言美にして其意深し、云く

宇 宙 觀

「同情同氣の男女二人相會する時其心鼓動して熱火熾盛なるは、是他なし、愛情の神光たる也、此愛情の光耀たる神妙にして甚だ力あり、此時に當りては抗拒なく撰擇なし、天の結び合はする者は人之を解き離すこと無し、」

五〇六

又ジュリプロウの言に云く、

「男の愛は遺棄に玉なす露の如し、其中には彼虹の諸の色盡く具はる、然れども日光之を照し耀やかすに至れば、忽ち消え失す、又女の愛は多角金剛の玉の如し、其殊勝なる所は金剛不壞なるに在り、但し其露滴も多角金剛石も共に神靈の日光の映照する者にして、其中には永遠不滅の光明ありて、下土の塵中に存す、」

是等の説も亦皆愛の天より出たる者なるを言はざるは無し、シルレル又云く、

「嗚呼盛なる哉愛の徳、愛は誠に神妙にして其力は限なし、宜なる哉人汝を名けて精神の王となすこと、諸立素皆汝に服す、汝は能く相生相

厭 生 主 義 と 樂 天 主 義

剋を調化す、凡そ生活する者にして、汝の眷顧を蒙らざる者は無し、其愛を讃歎すること大抵是の如し、ピオラント氏の語はシルレルの解釋とも謂ふ可し、曰く、

「宇宙間到處に於て呼吸し操作し活動し一切を成し一切を活す者は豈他ならんや唯愛たる而已、誠に是は愛の外ならざるなり、萬物の一和する事是の如く美を極むるは愛にあらすして何ぞや、嗚呼令徳よ、汝は眞に人心の至高き絶頂たり、汝も亦愛にあらすして何ぞや、汝も亦愛たる耳、汝は我衷にやどれる神なるぞよ、」

然るに往々世間を厭ひ人間を惡む者あるは不審とてフオス氏は又左の如く論せり、

「人或は言ん、人間を愛するも大なる利益なしと、然れども人間を輕んじ惡む者は必ず損耗多かる可し、云々、然ば我等は常に人間を愛す可し、是誠に道にかなふ事にて、亦我身の益となる者なり、且又歡樂幸福は之に由て得られん、愛の到る處には、凡て生命あり、然ども寂寥たる

五〇七

怨惡の地には苦患、死亡、災害、咒詛好んで住居す、

是に類する者亦我國歌の中にも乏からず、萬葉集の中なる金村が迷へる人をさとすといへる歌の如きは尤も善く言得たる者なり、

「ちよはよをみればたふとし、妻子みればめぐし愛くし、世の中はかくぞ道理もちとりのかゝらばしもよゆくへしらねば、うげぐつを脱すつるごとくふみぬきてゆくてふひとは、岩木よりなりてしひとか汝が名のらさね、あめへゆかば、汝がまにまに、つちならば、おほきみいます。このてらす月日のしたは、あまぐものむかぶすきはみ、たにぐのさはたるきはみ、きこしをす、國のまほらぞ、かにかくにほしきまにまに。しかにはあらじか。」

偕又耶蘇教の經典の中に愛を勸むる語甚だ多し、已に上に引たる復傳律例の言を見ても耶蘇教が愛を非とせざることを明白なり、彼言に

「汝心を盡し意を盡し精神を盡して汝の神エホバを愛すべし」

とあり、是は即ち人類が造物主宰の神に對して盡す可き愛なりとす、耶

蘇キリスト此語を引て人に答へたることあり、其事馬太傳福音書第二十二章三十四節より四十節までの文に見ゆ、

「耶蘇サドカイの人をして口を塞がしめたりと聞きてパリサイの人一つの處にあつまりけるが、其中なる一人の教師イエスを試みんために問て云けるは、師よ律法の中いづれの誠が大なる、耶蘇こたへけるは、汝ら心を盡し意を盡し精神を盡して主たる汝らの神を愛す可し、是第一にして大なる誠なり、第二も又これに同じ、己の如く汝の隣を愛す可し、一切の律法と預言者はこの二の誠によれり、」

此言によれば耶蘇教の中の最も大なる教は天を愛し人を愛するの事なり、此耶蘇の答の中なる第二の句は舊約全書利未記第十九章十八節に記さるゝ者にして、即ち

「人を愛すること己を愛するごとくせよ」

といふ金言なり、耶蘇教には只人類の愛を説く而已ならず造物主宰神の愛の深き事をも亦人に教ふ、誠に耶蘇教は愛教とも曰つべき者なり、

耶蘇教の起れるは全く愛によれる者なるが如し、新約書約翰傳福音書第五章に左の語あり、

五〇

「夫神はその生たまへる獨子を世にたまふほどに世の人を愛したまふ、是は凡て彼を信する者に亡ぶること無くして限りなき命をうけしめんが爲なり、神の其子を世に遣はしたまへるは世の罪を定めんとに非ず、彼によりて世を救はんがためなり、」
是は耶蘇が自ら宣べたる言なりといへば、耶蘇の降世は全く神の愛によれる者なりと謂ふ可し、然れば是は徹頭徹尾愛による者なり、耶蘇また言ふ

「人もし我を愛せば、我父(天父)また其人を愛すべし」

此教に於て愛の大切なること此の如し、是を以て使徒パウロ亦左の如く人に語れり、新約書哥林多前書第十三章に云く、

「假令我諸國の方言を言ひ、又天の使の言を言ふも、愛なき時は鳴る鉦や響く鏡鍔の如し、假令我預言する力あり、又諸の奧義を了り、知識を

得るも、亦山を移す程の信心あるも愛なき時は言ふに足らず、云々、
耶蘇の弟子の愛を説くことは是の如し、就中ヨハネの如きは愛を以て神の性となせり、其言に云く、

所愛者乎我儕、宜彼此相愛、蓋愛乃由神、凡愛者由神、而生且識神也、不愛者不識神、蓋神乃愛也。

是は使徒約翰第一書第四章七八節の語なり、耶蘇教は又只人天に對する愛を説く而已ならず、男女の愛をも天意に出る者となして、之を奨励す、即ち創世記第二章二十節より二十四節までに左の語あり、

「アダム、諸の家畜と天空の鳥と野の諸の獸に名を與へたり、然どアダムには之にかなふ助者見えざりき、是に於てエホバ神アダムを熟く睡らしめ、睡りし時、其肋骨の一を取り、肉を以て其處を填塞きたまへり、エホバ神アダムより取りたる肋骨を以て女を造り、之をアダムの所に携きたりたまへり、アダムの言けるは、是こそ吾骨の骨わが肉の肉なれ、是は男より取たる者なれば、女と名くべし」と、是故に人は其父

五一

母を離れて、其妻に合ひ、二人一體となる可し、

五二

此事の意義は文面の如くなるや、又は隱微の意味ある者なるやは、私の論點にあらざれば、措て言はざれども、此文に依ば夫婦の道は天の定むる所なること明かなり、然れば男女の愛は固より不善なる者にあらず、却て夫婦好合に必要な者なり、其事已に是の如くなれば、新舊兩約書中に夫婦婚姻等の譬喩多きも怪しむ可らざるなり、舊約書にはエホバ神自ら丈夫と稱し、其民イスラエルを妻と呼なせるあり、又新約書には耶穌を以て新郎となし、信徒を以て新婦となせるあり、是等の譬喩は其意味深長なる者なりと云ふ、

耶穌教は是の如く夫婦を以て天意に出る者となすが故に、夫婦相愛す可きことを教ふるが上に、又夫婦の快樂を損せざらんことを務む、即ち舊約書復律例第二十章に云ふ

「汝等戦争に臨む時は軍兵に向て言ふ可し、誰か女と契りて之を娶らざる者あるか、其人は家に歸る可し、恐くは己戰闘に死て他の人之を

娶らん、云々

是はエホバ神の意をうけてモーセが民に命じたる者なりと云ふ、又同書第二十四章五節に云ふ、

「人新に妻を娶りたる時は、戦争に出べからず、又何の事務をも任ざること無るべし、一年の間家に間居して其妻れる妻を慰むべし、」

其用意至れりと謂ふ可し、基督教の反對者たる佛教に於ては、其事如何ん上に引きたる如く、印度の最古典維陀經中に於ては、愛熱てふ者を以て萬物の根本と爲したりしが、段々と哲學思想の發達するに隨がひて、種々の理由よりして、印度の宗教學者はいつしか人生を悲觀して、厭生的傾向を來たし、遂に婆羅門教、ゾエグンタ哲學等悉く此世を穢土、火宅視し、夫の萬有の根本と稱せる愛を以て無明妄見の作用と爲し、涅槃寂滅(樂佛共に還)に還没する手段として、斷愛滅慾の教義を倡道するや、至れり、盡せり、基督教の悲觀的樂天主義なるに反して、佛教は全然たる悲觀的厭生主義と成りぬ、左に若干の經文を掲げて、之を證驗せん。

五三

宇 宙 觀

佛敎の始て漢土に傳はりし時、梵僧先四十二章經といふ者を翻譯して、漢人に授けたり、其經は意味解し易くして、小乗の敎理一切を含蓄すれば、一瞥の値ありとす、

「佛言く、人愛慾を懐いて、道を見ざるは、譬へば濁水の中に五彩を投じ、力めて之を攪亂せるが如し、衆人共に水上に臨むも、其影を見ることを得ず、愛慾交錯して、心中濁るが故に、道を見ざるなり、」

先是の如く佛は愛慾といふ者を凡て非とす、愛慾は種々の愛を總稱せる者なるが、佛者は男女の愛を尤も排斥せり、其言に云く、

「佛言く、愛慾は色より甚きは無し、色の慾たる大にして並ぶ者なし、」

「佛言く、妻子や寶宅に繋がるゝの患は牢獄よりも甚だし、桎梏牢獄は原赦あり、妻子の情慾は虎口の禍あれども、已尙ほ甘心して之に投ず、其罪赦さるること有らじ、」

「佛言く、愛慾の人に於ることは炬火を執て風に向ひて行くが如し、愚者炬火を釋すば必ず手を燒ん、」

厭生主義と樂天主義

「佛諸沙門に告て曰く、慎で女人を視る勿れ若し見るも慎で與に言ふ勿れ、若し與に言はば心に勸し行を正うせよ、云々、頭より足に至るまで、凡て内を視る可し、彼身何か有ん唯惡露諸不淨種を盛る而已と思ひて、汝の意を釋け、佛言く、人愛慾より愛を生じ、愛より畏を生ず、無愛は即ち無憂、無憂は即ち無畏なり、」

其言ふ所大抵是の如し、此外の諸經に説く所と是と同じ、例へば妙色三經に云ふが如し、云く、

「愛に由が故に愛を生ず、愛に由が故に怖を生ず、愛を離るれば憂もなしく怖もなし、」

又法乘義決定經に曰く、

「云何苦眞諦法、佛言、所謂以智慧刀斷除愛着、諸慾永盡、無餘證寂滅理、是名苦眞諦法、」

今之を以て夫の嚮に引きたる涅槃經、法句經等の語と參

照せば、必ずや思半ばに過ぐる者あらん、
 然し乍ら厭世を天下に標榜せる本家本元のシヨペンハ
 ウエル、ハルトマン二哲すらも、生を以て死に勝れりとし、
 苦行を排ぞけて享樂に就きたれば、其流を汲める獨伊の
 厭生詩人の如きは固より惟是れ失意の寐語をなせる而
 已にして、其實此の世界は、勿論夥多の一見不満足なるが
 如き物なきに非ざれども、尙是れ捨て難き享樂場なりと
 謂はざる可らず、厭生家は口を啓くや、鳩の如く苦苦と啼
 けども、苦は樂の種てふ俚言をすら理會せざる淺慮短見
 者流なれば、俱に人生の妙義を語るに足らざる也、該の俚
 言は實に深奥なる哲理を含蓄する諺にして、人生哲學を
 五字に縮寫したる者と謂ふべし、

論者往々生々の代りに殺々を倡ふ、然れども上に既に論
 ぜし如く、殺々死々は即ち之に幾萬倍する生々の手段方
 法なれば、造化の仁愛は宇宙に満ちて、萬物に普ねしとは、
 決して白髮三千丈的なる誇張の語に非ず、況んや生物相
 食むに於ても、造化は預め無痛絶息の麻睡劑を設備しお
 けるに於てをや、何の残忍か之れ有らん、己が生命を以て
 天地の大目的を達する、是れ寧ろ群生に取りて本懐にあ
 らざらん耶、殊に人生は多色なるを尙とぶ也、喜怒哀樂愛
 悪欲等の衆情は豈徒賦空具ならんや、千篇一律を以て福
 祉と誤り見做す莫れ、

(註) マツコル氏が其好著『基督教と學術道德』中に於て
 動物界の苦痛てふ問題につきて説ける所は大いに參

考に資けたるべき者あるが如し、左に之を轉載して讀者諸君の高覽に供す、

『世界を通觀するに、吾人が自然界を探究するに方りて其注意を第一に惹く現象は果して是れ神が我等の父たるの證明なるや、若し「自然」てふ者の目的を之が萬般の作工に就て窺はんと試むるならば、「自然」は何如にも殘忍無情刻薄にして、殆ど人を嘲弄せんとするの顔色あるにあらずや、自然てふ者の慈悲德澤を噴々頤讚せる人々を譏りて「ミル氏が人もし、自然の日々に行ひつゝある如くに行なふあらば、文明國にては死刑に處せらるゝを免かれ」と辨じたるは、幾分の道理ある者にあらずや、請ふ活眼をひらきて世界を觀察せよ、全能者たる父神の顔容は何處にかある。世は是れ恰も夫の預言者の卷物の如く「裏にも表にも俱に嗟歎と悲哀と憂患とを録すにあらずや、吾人は聖パウロの如く萬の受造物は今に至るまで共に歎き共に苦むことあるを知るにあらずや、是すなほち天地に俯仰觀察するにあたりて吾

人が第一に感ずる所たるなり、世には患難苦惱充ち満てり、而して此事たるや罪の未だ世に入り來らざる前より然るが如くにして、罪とは關係を有せざる者に似たり、地質學は萬般の岩石及び永遠なる山岳の證驗する所を吾人のために譯解す、人類の未だ場に登らざりし久しき前よりして世には争鬪殺戮の夥しく行なはれたる證驗歴々として見ゆ、戰慄して逃ぐるあれば猛烈にして追ふあり、其足は快捷に、其肢は強勁にして、其爪は能く裂き、其牙は能く咬むあり、強者は全く弱者の肉を食ふて活く、皆な是れ人類の未だ存在せざりし時代の正確なる記録中に特筆大書せられたる者なり、此事實と全能なる造物主の存在すてふ信念とを如何にして調和すべきや、實際造物主は世界てふ一大屠殺場の主なるの觀あれば也。

一種の見解を爲す者は曰く、創世記の卷首第一節と第二節とは相去る甚だ遠し、第一節は此世界が神に造られたる様を記し、第二節はサタンに破壊されたる様を記すと、此見解に據ば、夫の墮落せし天使の

首領及び其部下は此世界を籠絡して、之を自己の墮落に引き込みたるなり、斯の見解に於ては、世の苦難を勿論最初よりして罪惡の結果たらしめん然れども是れ唯多少或は然らんかとも思はるる臆想のみ深く究むるに足らず。

但し余輩は一層步履の確實なる領分に於て更に之が説明を求るを優れりとす。先づ今や我等は罪惡と離れたる苦難——即ち動物界に於ける苦痛の存在——を考がへつゝある也。此點に於ては聖パウロが大中保者に對する世界の關係を説ける時に述べたる見解を心に留むるを肝要とす。上に引證せる一文に於て、パウロは凡ての受造物が人類と苦を共にするのみならず、併せて其救はるることをも共にするを示せり。而して哥羅西書の第一章に於ても、パウロは基督の贖罪は宇宙全體を包括し、曾に人類のみならず、又見ゆる者をも見えざる者をも、凡そ智力または感情を具ふる者を悉く包括すといへり。思ふに此れの意味は蓋し左の如くならん、曰く神の永遠なる聖子が肉體

を受たるは從來造物主と受造物とを分離せしめし大隔絶を繋ぎ合せ、此兩者をして或る意味に於て一ならしめ、聖子が肉體を受たるの功德によりて受造物の諸階級を通じて悉く神性を分有せしむるに至ると。果して然らば、動物界の苦痛は人類の道德的練磨——即ち苦楚を嘗めて完全の地位に達する練磨——に類似するに非ざる歟。一見すれば獸力は飽までも其暴を恣いまくにするに似たり、我等が見る所は適種の生存に非ずして、最も強力なる、最も殘忍なる、最も刻薄なる者の生存なりとや謂はん。但し暫く待て、動物界に於てすらも、柔和なる者こそ、外觀は如何に之に反するが如くなるにもせよ、遂に地を嗣^{ついで}ことを得べきなれ、暴力はつひに必ず自ら敗るゝの性質を有す、是れ一は自力の反動により、一は遂に自ら由て以て亡さるべき大反對力を喚起するに因るなり。人間に於て然りとす、暴力を以て興り、暴力を以て自ら維持する權勢は遂に亡びざるを得ず、唯力のみを恃みし昔時の諸國は皆短命にして、岩に砕くる波濤の如く、互に相追つゝ

皆亡びたり。動物界に於ても亦然り。唯暴力のみに倚頼して生を保たんとする動物は漸く絶え、柔和にして有用なる動物は其後を襲ぎ來る。單に是れのみには止まらず、柔和なる動物をして強者の餌たるに易からしむと見えし品質は、正に是れ却て其生存に利せしものなり。是即ち苦難の練磨によりて發達せる結合の性質にして、能く柔和者を聯合せしめ以て壓制者に敵するに餘りあらしめたり。斯の如く我等は動物界に於てすらも戰鬪の勝利は遂に疾足強腕なる者に歸せずして、溫柔耐忍なる者に歸するを見る。柔和なる者は必ず地を嗣がん、聖十字架は必ず刀劍に勝たん。斯の如く下等受造物の中にも代贖的犠牲の法は行はれ、全族の改良の爲に身を捨る者あることを明らかならず。故に動物界の苦難は、我等が一見して思ふほどには刻薄亂暴なる無目的の者にもあらざらん歎。

然し乍ら此に尙他の一考あるあり、善く吾人をして苦難の存在する事實と全能なる仁父てふ信念とを一層明らかにかに調和するを得せ

しむ。動物の苦痛は果して其外見の如く大なるものなるか。夫れ苦痛の眞所在地は靈魂に在り、戰場に於て心激昂したる時に、兵士は其兵器の重さ及び創傷の痛みを感ぜざること屢あり、智力と感情他に向て強く注ぎをるによりて、肉體に於ける神經の痙攣の如きは其感ずる所にあらず。又た心が俄かに大震動を受けたる時に於ても然り、肉體上の苦惱は暫く感せらるゝこと無し。我等をして苦患を憂しと思はしむるものは我等の概括力なり、即ち記憶、思考、豫期の諸力之をして然らしむ。我等は從來經驗せし諸苦痛を記憶に収め、而して其將に受んとする苦痛を預じめ、強く心に感ずるなり。動物には此能力甚だ鮮し。彼等に於ては大抵苦痛の到る毎に、之を新に感じ、苦痛終れば其感も亦滅す。久しく苦惱するが如きこと有る無し。勿論人類に馴れて其支配訓練を受けたる或る動物は少しく苦痛を記憶し、また之を豫期するや疑ひなし。然れども我等が茲に論ずる所は野に在る動物に關す、而して彼等の苦痛が實際果して然か甚だ大なりやは疑ふに足

宇 宙 觀

れり。僅かに暫く追はれ、速かに撃たれ、而して其生命は終るなり。此點に於ては博士リビングストーンが其中央亞非利加紀行中に載せたる面白き考説を一瞥して可なり。博士或時獅子に襲はる、獅子博士の腕を啣へ、烈しく左右に打振りて其腕を折り、後ち博士を地上に置き、暫く打守りしが、遂に捨て去りぬ。博士獅子の爪下に在りながら知覺少しも亂れざりしが、其烈しく打ち振られし後は苦痛をも恐怖をも悉く失ひ了り、何時該猛獸己れを食ひ始むるにやと平氣にて興味半分獅子の爲す所を窺ひ居たりといふ。後日に至りて此大旅行家は其事を考へ、終に推斷して曰く、神の慈惠なる攝理に由りて、肉食する猛獸は先づ其餌たる動物の知覺神經を麻痺せしめ、其の恐怖を全た滅し去る者の如しと論定せり。されば此等の理由によりて我等は敢て信ず動物界には我等が苦痛と稱する如き苦痛は割合に甚だ鮮しと。

「私も相憐ひ申候。小生は無神論者の如くに論ずる志は幸も無御坐候。乍然

厭 生 主 義 と 樂 天 主 義

吾人の周圍に於て心匠並に慈惠の證據を小生は未だ他人の如く明かに見ず、又自ら願ふ如くにも明かに發見不致候。此世界には苦難の有り過ぐる様にも相見え申し候。慈悲を體する全能の神が故らに青蟲を生吞せしむる目的にてイグニツモン族を創造せられ候とか、鼠を捕へて弄ぶ様に猫を創造せられ候とは小生如何にも信じ難き義に御座候云々とはダーウキンがアサ、グレイに與へたる書翰として「ダーウキン傳」中に載せたる者に見えたる語なり。然れども青蟲が喰はるゝ時、啣かにも苦痛を感ずべしといふ何等の證據ありや。縦や青蟲の如き劣等なる小動物が能く苦痛快樂を感ずるにもせよ、是れ甚だ疑はしけれども、我等が知る限りを以て言へば青蟲が喰はるゝ時の感覺は却つて愉快ならんも計り難し。若し博士リビングストーンすら獅子に啣へられ打ち振られし後は凡ての苦痛と恐懼を忘れしならば、猫に弄ばるゝ鼠は幸も苦痛を感ぜざるならんと思ふは是れ道理に合ふ考に非ずや、其實我等が動物界に就て知れる所は實に僅少なるが故に、此問題に就ても輕々しく斷定を爲す可らざるなり。ダーウキン自らも、即ち其グレイに寄せたる同書中に於て更に「犬がニ

ウトンの智力を付與するに異らざる義に御坐候」と書き添へたり。余はウ
 ナルレス氏が其近著「グーウ非ニズム」中に於て余の本題に就て吐露せし
 所と同意見を載せたるを見て喜ぶなり。不思議にも、著者も亦た博士リビ
 ングストーンと獅子との話を引證せり、而して著者はグーウ非の著せ
 る「オリアン、オツ、スピシーズ」(動植種類起原論より左の語を轉載せり、此語
 によればグーウ非自身も動物中の苦痛に關して未だ其見を定めざり
 しや明かなり。曰く「我等生存競争を觀するに至りてや或は左の件々を十
 分に信じて心を慰めんか、——他なし、自然界の争闘は間斷なき者にあら
 ず、恐怖は其間に懐かるゝ無し、死は大抵疾速に來る、活潑なる者、健全なる
 者及び幸福なる者は生存して繁殖す。」

要するに、苦痛問題は古來哲學者及び神學者が頭を痛め
 たる者にして、其關する所重大なる者あらんとす、是を以
 てフリントは更に一步を進めて苦痛が時に或は生物界
 の必要具なる所以を指示せんと試みたり、其説を拔萃す

れば、大凡左の如し、

「苦痛は動物を警戒して其己れを傷け、或は殺さんとす、禍害を避けし
 むるに功あり、是れ預防の功用を有す。動物若し苦痛を感ずること無ん
 ば、其身恒に危殆に瀕すべし」

「リコント曰く、苦痛の感覺は吾人の有機體の外營に散處せる哨兵のみ、
 此等の斥候あるに非ずんば、吾人が生命の本城は不意を撃たれて直ちに
 乗とられん」と。されば今此に論述せる所の事が誤らざる限りは、それだ
 けの全範圍内に於ては、苦痛は惡き物にあらず、善き物にして、其物自身
 の存在をも、之を創起せる者の行爲をも共に是となす、是自らは目的に
 あらず、或る目的に達する手段なり、而して其目的たるや仁慈たる者な
 り、苦痛の性質自身もまた其創作者が仁慈なる者——己が娛樂のため
 に之を蒙むらしめず、其受造物の利益のために與へたまふ具——なる
 を示すが如き者なりとす。

茲に他の一事實ありて此事を尙更に明らかならしむ。苦痛は動物を驅

て奮勵努力せしむる刺衝力なり、而して諸能力が練磨せられて發達するは偏へに奮勵努力に由る者とす。各種の肉慾は、缺乏を感ずるに起因す、而して缺乏を感ずる事は、一種の苦痛なり。動物もし肉慾てふ者なく、また其肉慾に由て起る活動なくば、何如ぞや。其中なる許多の者が今然ることくに尙も果して美麗なるべきや。兎もし怖を懐かずんば、豈今日のごとくに快捷ならんや。獅子もし飢を感せずんば、豈今日のごとく強勁ならんや。人類もし此世にありて、毫も闘ふべき者なくんば、豈今日の如く活潑智巧、技術に富み文明に進まんや。苦痛は動物の發達を完全ならしむるに與かりて力あり、是れ善良なる目的を有す、既に善良なるが故に此の目的たるや。苦痛を之が手段に用ふるを可とす、假令發達が幸福を伴ひ生ずる無きに於てすらも、此事は依然として然る可し。抑も發達なる者は、其れ自身に於て甚だ貴き目的なれば、之に自然に伴ふ苦痛は、是れ眞箇の惡事には非ずして、固より何の辨解をも要せざる也。彼の自ら活動して、食を求むるを要せず、又屠殺せられて、食膳に供せら

るべきにもあらずして、徒らに飽食肥大せる封豕を誰か動物世界の理想に最も近き者と稱せんや。我は實に然か思惟する能はざる也。凡そ動物をして其性質を改良發達せしむべく、其諸能力を働かしむるに要するが如き苦痛は、皆造化が其智慧を以て正當に之に配與せる者なりとす。……苦痛が其受苦者を完美の域に驅るの力は、動物界よりも人間界に於て最も著しく、見つべく、其身體上に及ぶ影響よりも精神上に及ぶ勢力に於て最も著しく、見つべし。是れ靈魂を矯正し訓練するに於て其功最も大なり。是れ心の硬愎なる者を柔らげ、驕慢なる者を挫き、勇氣と忍耐を生せしめ、同情同感を擴め、敬天の感情を働かしめ、全性情を鍛錬し、強堅にし、且高尚にするに功あり。凡そ人は、精金となりて出で來らんに、は必らず先づ苦難の爐を経ざるべからず。苦痛の上に智慧と仁恵とが顯はれたる事は、進化説の確立し得るだけ、亦證據を彼より得る者のごとし。該説が證驗せらるゝだけ、缺乏、生存競争、競争の苦難、及び死は、是れ動物の諸の種類を形成し、改良し、裝飾する

所以の手段と見做れざる可らざるが如くなればなり。果して然らんに
は、箇々の動物が蒙むる苦難は單に其物自身の益となるべき者たるの
みならず、亦將來永く其動物の種類^の福となるべき者たることを學理
上より證明せらるべし。一物も獨自ら生れず、獨り自ら死なすとの眞理
は此の如く著明の左驗を受くべし。但し此眞理たるや、該左證を絶て受
ること無くとも、又は嚴に學理的なる之が證驗終に出で來るなからん
とも、既に之が爲めには明々白々たる種類^の十分なる證據の在るあれ
ば憂ふるに足らざる也。』

吾

第十九章 悲觀裏の喜觀

運命と立命——結論

以上縷々説來り説去れる如く、哲人の達觀を借りて言へ
ば、世間の苦樂は幾んど其義を顛倒し來らんとす。實に是
の如く造化の所爲たるや、疎なるが如くにして極めて密
愚なるが如くにして極めて智、刻薄なるに似て而も至仁、
無道なるに似て而も至義、是其全知全能なる所なりとす。
天網恢恢疎而不漏^トとは老子が此の一端を道破したる千
古の卓言と謂ふべし。造化は道を以て其意旨と爲す、老子
が又道の妙を極讚せるも全く此の殊勝なる知見よりこ
そ出で來りし者なれ。

吾

宇 宙 觀

斯の如く造化は至仁至愛なりと雖も、固より此世の父母
が其子の鍾愛に溺れて姑息に失し、動すれば驕兒を造り
出すの比に非ず、人間の父母が胸を以て其子女を愛する
に引かへて、天帝(造化を假に然か呼ぶ)は頭を以て億兆を愛し給ふ、其
生殺與奪蓋し皆理由あらん、吾等子女たる者、叨りに天父
を怨むべきに非ず、
此世には勿論善惡混合す、但し吾人が普通に善惡と稱す
る所の者は皆眞箇の善惡なるには非ず、王陽明或る時其
弟子が花間の草を除きつゝあるを看て曰く、天地の生々
するや、花も草も同一のみ、何ぞ善惡の分別あらん乎、子若
し花を觀んと欲さば、花を以て善と爲し、草を以て惡と爲
さん、草を用ひんと欲する時の如きは、復草を以て善と爲

悲 觀 裏 喜 觀

さん、此等の善惡皆己れの軀殼より念を起し來り、己れの
用否を以て取舍の尺度と爲す而已と、此論固より馮貞白
の論ぜる如く極端に絶對的には主張す可らずと雖も、斯
る事實も亦頗る多し、夫の田うこぎ草の如し、元と是れ雜
草の一のみ、然れども一たび肺病に功ありと稱するや、忽
ち靈草として天下に持て離さるゝに非ずや、然れば吾人
が目して善惡と爲す者悉く天帝の眼中にも全く善惡な
りとは謂ふ可らず、之を要するに、吾人は只眼前に於る箇
々の局部を看るのみ、之に反して造物は直ちに全局を通
觀す、其見解に異同あるは勿論の事とす、恰も本因坊と小
兒と烏鷺を闘はす如けん、吾人が觀る所は咫尺のみ、天帝
の眼界は萬里一望、安んぞ大區別其間に存せざるを得ん

宇 宙 觀

や、然るに咫尺を以て萬物を是非するは、恰かも夏蟲が氷雪を笑ふ如けん。天道是耶非耶。てふ疑問は吾人の短日月内に容易く答へ得らるべき者に非ず。是非は結局に至りて始めて明らかになるべき者とす。此の道理を以てカントは眞神の存在及び靈魂の不滅を證定せんと試みたりき。如何となれば時處俱に無窮なる宇宙に在り乍ら、僅々五六十一年内に天道の是非を論定せんとすとは、少しく過當の望と謂はざる可らず。

吾

悲 觀 の 喜 觀

生の大福德と感ぜらるれば也。勿論或る論者の如く、萬物は限りなく向上すと主張するは虚妄の見なること、猶萬物は限りなく進化すと主張するが如し。夫れ進化あれば、退化あり、向上あれば、又向下あり、人間世界は此現在の人間世界を以て其の正状と爲す。生民以來既に五六千歳、而して人間世界は依然として同一の人間世界なり、却つて退化及び墮落の跡こそ著るしけれ。バビロニア及びアッシリア、並にエジプトの大文明は已に共に亡び失せたり、中米なるバレンクエ、ユカタン等の文明も然り。印度の文明も非常の退歩をなして、人民も亦墮落し了りぬ。英國も亦遂にバビロニアの轍を往きて、倫敦は狼の伏す叢となり、驚の巢くふ澤とならんは、識者の往々説く所に非ずや。

吾

宇 宙 觀

今日の人間向上論は往時の(當時なる)人間圓成論(Perfectionism)の變體なる而已。余輩は人なれば依然人たらん事を欲す。天人となるをも悪鬼となるをも願はざる也。只人間として其天賦なる智徳情意を十分に發展せしめん事を冀ふのみ、世界も人間も段々歳月を疊ぬるや竟に滅亡せざるを得ず。既に天空には壞滅せる星雲散點するに非ずや、尙何の無限向上か之有らん、果は只冷却して寒死するあらん而已！然れども是は又造化生々の妙法にして、其循環するや恰も幼者が少年となり壯年となり老年となりて終に死するが如し、而して其死するは又(上に説ける如く)更に生ぜんが爲のみ、其狀全く環の端なきが如し、夫世界は幾千萬年繼續し來れる此の狀態を以て之が正

五美

悲 觀 裏 喜 觀

狀と爲すと雖ども、其中に棲息する群生は之を以て福樂の境と爲し、春夏に至るや野も山も水も空も生物充ち満ちて、一齊に造物主の讚美を歌ひ舞ふ極めて旺ん也、紅紫の爛漫たる翠綠の扶疎たる、皎素の玲瓏たる、孰れか絶美の觀ならざらん、審美學は亦是れ一種の自然神學(natural theology)となりぬ、カントが之を講究せるや至れり盡せり、而して天地間の美は物象に於るよりも靈心に於ける甚だ大なりとカントは悟れり、山嶽の巍峨たる、河海の深浚なる、皆是れ崇高淵邃の情思を極めしむ、人間の價値爲に千萬倍すと謂ふ可し、何たる好世界ぞよ！純乎たる厭世悲觀は病患なり、與す可らず、人生固より傷心事多し、悲觀的樂天主義こそ最も正當の見なるらめ(拙著人生觀を參觀せよ)是れ悲

五七

宇 宙 觀

めば則ち驕らずして謹慎なる可く、天を樂めば則ち安心立命を獲て各々其天分を盡さんと勵むべければ也。喜觀と悲觀の調和は茲に成らん。極端なる宿命説や命數觀の弊瀆に陥らじ、孔門に曰く死生有命、富貴在天と、是れ己が力を盡して後其分に安んずる者の語と見做すを要す、決して袖手無爲以て自然に任すべきの謂に非ず、儒者往々誤解す、歎ず可し、故に墨子は夙に斯る誤解の徒を戒めて曰く、執有命者不仁と、勿論世界には豪傑にして失意の人多し、是れ社會組織及び國家制度の宜しからざるに職として維れ由る者とす、韓愈杜甫をして落第せしめたる國家、ボルンズ、チデロをして餓死に瀕せしめたる社會は、最も責むべく最も憫れむべしと雖も、此等の人豪が不遇な

悲 觀 裏 の 喜 觀

りしは宿命に由るに非ず、固より人爲のみ、語に曰く、「天は自ら勵む人を助く」と、務め勵まざるは有る可らず、此點に就きては基督が其門徒に授けたる祈禱文——所謂主禱文 Lord's Prayer——の第二項最も教と爲すに足れるが如し、曰く——「爾心の天に成る如く、地にも成せ給へ」

ピーチャル師と雄辯を競へるチエーピン (Chapin) 博士が右の主禱文に關せる有名なる講義は、合理且敬虔にして、大いに参考に資けたらざるばあらず、今此項に屬する講話の一部を轉載して、余輩の不辯なる説明に代へんと欲す、是れ本著者嘗て該文を和譯したれば也 (主禱講話と題する書を見よ)

「人類が神に對する關係に就きて基督教義に於ては二個の觀念あり、即ち倚賴と從順是れなり、宇宙萬物を覆へる神靈の中に吾人は生活動作

宇 宙 觀

し以て今日あるを得るなり、此神靈を離れては恰も源泉を離れたる涓滴の如く吾人は存在すること能はず、萬有の機關を司宰する者の管理は吾人が生命の諸能に及び、其常住の權能は吾人を保維し、其必然の規矩は吾人を圍衛す、實に吾人は無窮の權能によりて造られたる者にして、無盡の仁慈より恩給を受る者たり、故に人性其物を觀すれば自己の能力とは之れ無きに似たり、人は天性により自然にして人類以上の權能者に倚賴する者なり、古來哲學者流が人類普通の性情中に造物主を覺知するの能力ありと認めたるは蓋し此自然の倚賴心あるを以てなり、

然れども人性中には此倚賴心の外に他の一心識あり、即ち心靈上に於て造物者に肖たることを識る是なり、吾人は實に造物者に造られたる而已ならず、又其裔なることを識れり、吾人は造物者と其性を同じくする所あり、而して此性の榮光は意志の自由[○]に在り、即ち働き若くは拒み、擇み或は斥くるの力に在り、故に吾人は有限物としては無限の權能に

悲 觀 裏 喜 觀

倚賴し、又物質物としては必然即ち不可抗の規矩に管理せらるるといへども、靈物としては自己専司の範圍、即ち自意行動の範圍を有せり、此範圍内には神其自主齊全の權を突入し給はず、但其固有の正義を示し給ふなり、此範圍に於ては神は人を強制し給はず、但其良知に訴へ給ふなり、全能の造物主として人の奉事を強要せず、但心靈の主宰として其自己の忠順を求め給へり、されば上に陳べたる如く人の靈魂は一面に於て無能倚賴の形ありと雖ども、他の一面に於ては自由の心識、權能の自認、責任の感覺を顯はすなり、而て人の通性たる此倚賴心若し神の存在を證すとせば、此從順の觀念——即ち天命には違ふべしとの普通なる良知は亦以て神の存在を徵するに足るの明證なり、而して余は再言す、基督教は此兩觀念を融和せりと、吾人眞實に此精神を會得服膺せば、此兩觀念を分離すること能はず、此兩觀念は合して純一の觀念となり、吾人が神に對する感情は畏敬と親愛、祈願と恭敬責任と安心、同一時に併發す、但し余は今基督教に於る實踐的覺悟を説く而已、其理論に至りて

宇 宙 觀

は千古未解の大問題あり、即ち神の主宰と人の能動との關係是なり、然ども余は再言す我が宗教の實行的覺悟——即ち吾人が自然に躬行しつ日々之に依て生活する所の覺悟——換言せば本講話の題たる禱言を唱ふる時の吾人が心情は此理論上の問題の爲めに阻喪すること無しと、此心情に就て縦し論理は矛盾するにもせよ、他時には論辨することあるにもせよ、吾人が神前に跪く時は即ち倚頼と從順の兩觀念同時に心頭に發るなり、神が必然の規矩を以て主宰し給ふ範圍の廣大なることを感じ、又人の自意行動を檢束し給はざる範圍の廣きことを感じつゝ、兩情交感の中に於て吾人は爾旨を成らせ給へと祈るべし、されど此禱文の言辭を汎く唱ふる時は吾人の心中に此兩情具發すといへども、時としては特に一情の盛んに發り、偶ま他の一情を壓することあり、此時に當りても本題の禱文は吾人が感情を表白するに適當なる言辭たらん、蓋し此禱文は或は安命を表し或は責任を表して唱へ得べければなり、今此兩情を講究するに當りてや余が説話も自ら下の二項

悲 觀 裏 喜 觀

と成るなり。
第一、されば余は時として吾人の心中に倚頼の情の偏發することあるを認むるなり、吾人廣く物界を察せば必ず無限權能の彰表を觀ん、此權能は萬有の中心にして六合の内外に彌り千差萬別の中に諧合を和生し、巨大の諸力を發出して美なる秩序を變理す、之を大にしては巍々たる物界皆其規矩に従ひ、之を小にしては秋毫の微に至り、一管一弁動いて皆其時を失はず、海潮は満干の變化を爲し、遊星は旋轉して止まらず、此中に於て天地機關の大輪は靜かに運轉して其業を成す、觀じ來りて吾人自身を省れば己が存在も亦此大主宰の統御に倚り、造物者の明鑑は此錯雜を透照して吾人が頭髮の數を悉し、此大和諧に彰はれたる神明は光を以て吾人を照らし、風を以て吾人を包めるを知る、斯く觀じて深く神力の大なるを覺り、又此大神力は即ち秩序慈仁美麗の力なることを感得すれば、吾人は自から唯此絶大機關の一小部分として之に倚頼する觀を爲すの外、又他念の發る無し、還て此洪大なる全體に憑

宇 宙 觀

倚し、萬物の總大潮流に投合して、敬虔の歎聲を發す、此宇宙必然の大勢に參同して、爾旨を成らせ給へ」と衷心より吾人は叫ぶなり。

又時ありて吾人が周圍の元素爆裂し心膽を驚殺することあり、地震は人家を顛覆し噴火は菜園を枯す、暴風海を蹴て怒濤天を衝き船將に沒せんとして數百の人員叫喊すれども聞く者なく、或は瘴疫見えざる大軍の如く地上を横行し、萬姓を塵し國民を圍み、又は饑饉人家に侵入し、荒れたる田野を覆ふ、夫の平靜なる秩序を以て吾人が讚歎を惹き、富饒の源を開きて吾人が缺乏に充る所の勢力は時ありて斯く吾人が破滅憂苦の因となる、吾人實に自己の微弱なるを覺ゆ、正に是れ人類以上の強腕ありて秘蘊の勢力を開放し若くは宇宙の常道を一時阻絶する也、吾人之を如何ともすること能はず、又之を通ること能はず、吾人が術は施すべき所なし、吾人は黙從せざるを得ず、斯る時に於ても若し吾人が信仰にして明確堅固ならば、本題の禱語は應當に吾人が衷心より發すべきなり。

吾

悲 觀 の 喜 觀

或は吾人一身上の災難に陥りたるあらん、從來の企圖破れて目的を失ひ、希望斷絶し、年來望を屬したる事は華の如く脆く挫折して反て吾人が身を傷け、若くは多事を慮る際突然病魔に襲はれ、又は吾人が勵精するに拘はらず貧苦は兵士の如く來り、或は吾人が親縁中の極て愛づる者に哀別して新墓の側に慟哭し、已むなくも可愛の屍を塵土に委ね、愛に満ちて喪家に歸れば、空室影暗くして初めて其荒めるを知ん、斯る時に於て吾人は自己の極めて微弱にして、吾人が運命と時機を打理する力力は冥々の中に潛回默運し、吾人は之に抵抗する能はざるものなりとの觀念轉た心に逼んとす、されども縱令此患苦に沈淪するとも吾人の心若し真正に恭順ならば、本題の禱語の若く吾人の心に適合する言辭は更に他に有ること無からん。

以上に陳べたる場合及び此他あらゆる人生の禍患に遭遇したる時に吾人が心を自然に刺撃するものは倚頼の觀念、即ち偏へに神明に倚頼するの觀念なり、蓋吾人が平素望を屬して安全と思へる事は忽ちにし

吾

宇 宙 觀

て破れ去て術の施すべきなく、吾人が能力は恰も枯葉の如く、而して吾人が世路の風波の避所として平素親愛を込めたる人々は頓みに去りつ、吾人獨り子然たればなり、余は再言す此時に於て吾人が心の全幅を蔽ふものは倚頼の情即ち偏へに無限なる神明に倚頼するの感覺なり、されば吾人が爾旨を成らせ給へといふも亦宜ならずや、嗟夫此語の外別に何事をか言ひ得るぞや。

然れども余は尙ほ進んで言はん、吾人充分の意味を會得して此禱語を唱へなば、是れ實に神力を思惟する而已には非るなり、蓋し吾人は神の全能を其他の諸徳より抽象して一箇に思惟せず、吾人が恭順する能力は抑も誰の能力なるやと思考するらん、又吾人は神の主權と聖意とを混同視すべからず、神の主權は其自主無限の統御權なり、而して聖意は此主權を施行するの情なり、權能は器なり、聖意は此器を用るの志なり、權能は徳性に非ず、上の講話に於て開示したるが如く、權能は吾人が實畏讚歎を惹起すべきも、權能のみにては吾人が崇拜を促す能はざるな

悲 觀 裏 喜 觀

り、故に吾人が爾旨を成らせ給へとして祈る時には吾人は神の性格、即ち其權能のみならず、其叡智正義懿徳に關しても憶念するなり、事此に出でずば吾人が祈禱は奴隸的鄙屈にして真正の崇拜に非ず、強制の聽從にして信心の希願に非ざんとす、基督教徒たるものは神の主權の顯はれたる所及び凡て神の爲し給ふ事に就て常に其道義上の意味、何如んと察す、要するに基督教徒は萬事に於て神を識認するなり、然れども唯權能を觀て其意を察せざる者、即ち其誰の意なるやを察せず、また其何なるやをも考へずして、單に唱へざるを得ざるが故にして、爾旨を成らせ給へと唱ふる者は、本題禱言の何等の意味をも解せざるべきなり、斯の如き人は縦令ひ宇宙に神無くして單に運命の轉輪に羈され、自然の盲力に驅らるゝとも尙必らず同一の聽從を唱稱せん、此誤謬に密着する、實に其一變態ともいふべきは運命定數の迷信にして、爾旨を成らせ給へといふ語を以て拱手怠慢の口實と爲し去らんとす、真情無くして祇虔なる甘從の態を爲す者多きとは疑ふべくもあら

宇 宙 觀

吾
す、彼等は自己の愚痴罪惡の結果を以て神の攝理に歸するなり、懶者は其實らざる田野を見て悲み、乃ち爾旨を成らせ給へといへり、爾旨を成らせ給へと叫ぶあり、知らずや是れなん財産を浪費して遂に貧苦に纏縛せられし人なるを、又自己の精力を思慮なく過用して健全の法を破り、死に垂んとして同じく此祇度なる語を發する者あり、吾人は須く會得すべし此運命定數の迷信は或は懶惰なる聽従と爲るも、又は思慮無き倚頼と爲るも、共に是れ眞正の甘從に非ざる者なり、萬有萬事を掌管する神の攝理を認識するは正當のことたり、然れども攝理は吾人と共に働くものにして吾人に代りて働くものに非ざるなり、吾人が困難の壘を倒し災患の壁を覆さんとする急劇なる熱心は、毫も不虔なる不信心に非ずして反て雄大たる事業の原動力たり、神は之を獎勵し之が爲に廣大たる行動の範圍を吾人が面前に開き給へり、而して吾人が事業を成すは唯之に藉て始めて奏功を期すべきなり、此努力を神が沮み給ふと思ふは是れ神が至智至仁の目的の爲に設け給へる規法を自ら破

悲 觀 裏 喜 觀

り給ふと思ふに均し、此努力を爲さずして災禍を神意に歸するは是れ信仰と愚痴とを混同し、宗教と怠惰とを渾雜するものなり、吾人は唯只勉勵努力して然して後始めて神意の冥々中に吾人と共に働きつゝあるを覺知すべけん、吾人が努力其の極度に達して然る後に始めて吾人を圓術する神意を察知し得べき而已、吾人が爲し得べき事は悉く爲し盡せしに拘らず、吾人が意志よりも尙ほ勢力ある、智慧ある優れたる冥々の大意志が吾人の所見に反して働き、事物を吾人が意表に安排するを感得したる時に於て始めて深き倚頼の心識こそ起るべけれ、此に至りて始めて眞誠なる甘從の祈禱は吾人が口頭より出づべきなり、されば我等は人力の微弱なるを感覺して、爾旨を成らせ給へと唱ふるは一大重事なることを知れり、不平の聽従にもあらず、怠惰の倚頼にも虚飾の儀式にも非らずして、驚愕と痛苦とに打撃せられながらも衷心よりして眞實に此禱を爲すは寔に偉大の事なりとす、全幅の精神を込めて之を唱へ、泣然として涙下る時信仰の光明に映じて之を唱ふるは

宇 宙 觀

決して輕き事に非ざる也』

五五〇

宇 宙 觀 大 尾

明治三十七年十二月十日印刷
明治三十七年十二月十三日發行

宇宙觀與附
定價金八拾五錢



不 許
複 製

著 作 者

高 橋 五 郎
東京市芝區三島町十二番地

發 行 者

前 川 亦 三 郎
東京市日本橋區箔屋町十六番地

印 刷 者

三 島 宇 一 郎
東京市神田區表神保町二番地

印 刷 所

弘 文 堂
同 所 電話本局二三一六番

發 行 所

東京市日本橋區箔屋町

前 川 文 榮 閣

近世の大著述

高橋五郎先生新著

宇宙觀

定價五拾五錢
小包料拾五錢

既に人生觀あり宇宙觀(世界觀)無んば有らず、此
需に應て本書は出づ、萬物の靈たる人只醉生夢死
世は何たる、我は何たる、生は何、死は何、花は
何が故に紅なる、柳は何が故に緑なる、之を知ず
して豈禽獸と伍す可んや、本宇宙觀は世界、宇宙、
天地、乾坤開闢、創造、進化、自由、唯物、唯心、
實有、假有、學術宗教、地質、天文、哲學、科學、
人類、動物、有神、無神、有佛、無佛、耶佛、道
儒、凡神、一神、太極、無極、無窮、有限、一元、
二元、有命、無命、運命、死生、道德、倫理、厭
生、樂天、預言、先知、神秘、催眠等悉く詳論し
て遺さず、眞に偉大なる一偉畫(パノラマ)の如し

加藤咄堂先生著

女性觀

定價卅五錢
郵稅六錢

美神の權化として崇拜すべきか、惡魔の化身として厭忌すべきか、
本書は著者が流麗の文と獨特の觀察を以て女性觀の變遷歴史上の
活動を叙し、寶貨、嫁娶等の奇習異俗より名媛才女か佳話並に闇
黒面の女性に及び、婚姻、獨居、職業等の問題を究て社會上の地
位を明し、更に戀愛、嫉妬等心理的現象を示し、筆を女性の教育
婦徳の養成に關し、神が窺か請ふ一讀を吝む勿れ

小山左文二先生著

日本文法の解説及練習

定價五拾錢
郵稅八錢

本書は内容の豊富なる點に於て解説の周到精密なる點に於て文法
書中於て一隅を有せるものなり、若し各種の中等學校學生に於て
習得せしめられざるはなかるべく各種の高等學校入學受驗者にして
應ずるの案を發し得べく中學校國語科教官に見せしめて試問に
法教授の餘り餘り自來教授の材料に供し得べく操業者にして本
を一閱せば餘り餘り自來教授の材料に供し得べく操業者にして本
を認められよ。

東京市日本橋區箱町六十番地
文榮閣出版及發賣書目

海軍軍令部附譯官高須五湖先生著
* 日露會話獨習 *
總價金五拾錢
郵稅六錢

露語に精通せらるゝ高須五湖先生多年の研究に依り、獨力譯語を編り應用するの便を開かれたり、露語の發音文法より日常必要な各種の用語を網羅し終に當世會話の粹を萃む、眞に刻下の好著亦永代の名作と稱す可し、

長田秋濤君著

* 世界の魔公園巴里 *
定價金五拾錢
郵稅八錢

文明中の文明を以て世界に誇る巴里。紅粉を剃し來れば即ち骸骨。腥風指端に迸し一劣鋭如意的の筆。文明てふ大假面を粉飾し去つて。大鬼は醜態小鬼は哭する底の活ける慘劇は眼前に展開さる。苟も血あるものは。三伏流汗の候だも瘡痍にして薬を生ぜん。

加藤咄堂先生著

* 運命觀 *
菊版金一冊
定價金五拾錢
郵稅六錢

本書は加藤先生が斬新の論を以て八封、陰陽、五行、干支、九星等の舊運命觀を擊破し、深遠なる哲學科學の眞理によりて新運命觀を建設し、更に人生の眞趣を解して、これが開拓途を説き、終に運命は神秘なる、之を開くのは吾人の手にありと絶叫し、古來の實例を擧げて、此の運命と奮闘して成功の地位に達せるの原因を示す、流麗の文は健全の想と相待て現代の文壇に一異彩を放たん。

加藤咄堂先生著

* 死生觀 *
定價金五拾錢
郵稅六錢

著者が多年の研究を傾け盡して古來の哲人傑士英雄烈婦が事跡に徴して、更に東西の學識に考へ、終に此千古の疑問に一大解決を與へられたるものなり

東京市日本橋區箱町六十番地
文榮閣出版及發賣書目

獨乙グーテ氏原著 高橋五郎先生註
* フアウスト *
定價六拾錢
郵稅十錢

十九世紀の最大軍人ナポレオン・ボナパルトにグーテを見る。勿論眞實の偉人を謂ふ也、嗚呼英雄は英雄を知る、要するにグーテは十九世紀第一の偉人と公評せられ、而して其の傑作フアウストは十九世紀の最大傑作と稱せらるゝ、其天下各國の語に翻譯せられたる夥し、今獨英兩國語に精しき高橋五郎先生之を原文原意に照して原文一行邦文一行兩々相對して精密に一字を増減せず最も忠實に翻譯せらるゝ、獨兩文のフアウスト讀者本譯書に由て原意を確知することを得べし、近來稀なる大翻譯と謂ふべし、高橋先生の譯稿は人生哲學の翻譯以來已に天下の均く認むる所なれば、豈にか説さず、諺曰フアウストを讀む者は讀書を説かずと、今より吾人は始めて讀書を讀み得ん歟

獨乙グーテ氏原著 高橋五郎先生註

* フアウスト *
定價四拾五錢
郵稅六錢

本書は英譯の粹を選び必要な註疏を附して初學者の便にせらるゝ、以て學校の教科書とす可く、以て英學者の獨研究に供せらる可し、本書出てフアウスト始めて我國に紹介せらるゝと云ふべし

宮中御歌所寄人 中柳秋香先生著

* 古今集詳解 *
和裝美本
全四冊

卷一 卷二 卷三 卷四
卷一 夏秋夕夜 卷二 冬春 卷三 夏秋夕夜 卷四 冬春
本書は國文學の泰斗中柳秋香先生が多年の研究に成りたる大著にして、詞に關はれたる一首の心の組合せ、風調、語勢に就て生ずる餘情等を懇切に説き分け、一首の妙處を示したる、古人未發、未曾有の解釋、一讀忽ち歌の秘訣を悟るべく、而も講義筆記體總括かな付にせられたれば、國歌國文學研究者は勿論我國文學の花を味はんとする者は是非一讀すべき也

中柳秋香先生著 增訂四版

* 千草の錦 *
菊版金一冊
定價五拾錢
郵稅八錢

此書は中柳秋香先生が三十餘年閱讀の余暇、古學復興以來、數十卷の文中金五の錦あるもの抄録せられしが、積んで數十卷と成りし中、就て男女學生の模範となるべき、其れに要語數萬を載せ、作習の模範と應用とに供せられし、他に其比を見ざる最良の文藝なり、國文學研究者は是非一本を座右に供すべき也

東京市本橋區箱屋六十番地
文榮閣出版及發賣書目

宮中御歌所寄人 中郵秋香先生新作
華族女學校講師 小野鷗堂先生淨書

新編手紙

(川子男)

木版半紙摺
無類の美本
男女各一冊
定價四拾錢
郵税四錢

女子文の手ほどき
本書は中郵秋香先生の新作にして書簡文習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總括かな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鷗堂先生が大学に傳かれたれば習字の正本として此上なき良書なり

新編書簡文例

(川子男)

木版半紙摺
顔高尙優美
男女各一冊
定價六拾錢
郵税六錢

新編女子書簡文例
本書の文例は現代の文藝中郵秋香先生の胸襟より進出せしものなれば一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陥らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は紙硯界の巨擘小野鷗堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の總鑑として上乗の書なり、特別

新編書簡文法式

(川子男)

總クロズ
金文字入
定價五十錢
郵税六錢

新編女子書簡文法式
女子は男子と自ら差別ありて特に散らし文は小野鷗堂先生の書に係るものを挿入せり
此法式は元來封建制度の代に於ける尊卑上下に就きて種々の段階を分つが如き煩を避け、今日の現狀に依り新舊を對照して以て時の宜に従ひ、適當の式を設けられしものなり、故に人間處世には一日も缺くべからざるは勿論、苟も筆を書簡に托る者は時時其書を放つべからざる要書なり

に上欄に類語數千句を掲げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待り斯道の完璧と稱すべきものなり

書簡文の法式男女に別ちて大成せるものは、古來未だ嘗て有らず、蓋し書簡に法式のなからざるべからざるは、尙人に禮儀の缺くべからざるが如く、苟も人に禮儀なく、書簡に法式なからんか、其人如何に貴しと雖、又いかに富めりと雖、一日も交際場裡に立つこと能はざるべし、御歌所寄人中郵秋香先生深くこゝに感ぜられ、即ち男女に就きて各書簡文法式の撰著ありて之を世に公にせらる

東京市本橋區箱屋六十番地
文榮閣出版及發賣書目

豫言者 宮崎虎之助君著

我が新福音

定價四拾錢
郵税六錢

古來天師若くは豫言者は國家多難の時に起れり、我國近來豫言者を呼ぶ聲層一層多く且高きを加ふ、豈にらんや豫言者既に起りて吾人の前に在らんとは、俗姓宮崎今道名をメシヤ佛陀と號す、抱負の深大其名に愕然天下爲に騒然たる宜なる哉、此仁自ら我が新福音を著し吾來の宗教をして後に瞻若たらしむ、必や二十世以後心靈界の大革命の本源たらん、請ふ割日一讀せよ

高橋五郎先生新著

戦争哲學

定價四拾錢
郵税六錢

戦争や小は民人の禍禍、大は一國の存亡に關す、暗中飛躍程危險なるは無し、幸に世戦争哲學なる者あり、著者即ち國家社會上より宗教道徳上より、人道、美術、哲學上平等上より推究し、東西古今の哲學を會萃折衷して此天下の最大事に千古の大變案を下せり、朝野官民の必讀は勿論、出て戦ふ者居て守る者に戦争の哲理を常に胸裏に蔵するを要す、立論の新警目を醒すに足る也

高橋五郎先生著

最新一元哲學

定價五拾錢
郵税八錢

著者が該博の知識と深遠の考慮とを以て一元哲學を根底より歴史的に社會的に哲學的に駁論し、附録に「天人論」の一元主義を無遠慮に評論して餘蘊なし

高橋五郎先生著

世界三聖論

定價四拾錢
郵税六錢

著者が富麗の知識と犀利の筆鋒を以て縱横に論評せらる、壯快の文字深遠の思想三聖の眞面目をして紙上に躍如たらしむ

高橋五郎先生著

人生觀

定價五拾錢
郵税八錢

本書は古今幾多の人生觀を摺集し遂に健全無病なる安心立命の大人生觀を打出し來れるものなれば、人間の人間たる本分を知らんと欲する者は一讀せざんばある可らず

人生哲學 定價五拾錢
郵稅八錢
哲學博士リ一君著 高橋五郎君譯
本書は超群絶倫の人生哲學にして學問と宗教此書に於て始めて學問の利階に達せりと云ふべし、實に萬人必讀の真書なり

人間論 定價卅三錢
郵稅六錢
黒岩周六君序 湯淺觀明君著
百の哲學書を讀まんより千の科學書を看んよりはと一抱負を以て世に出づるや、稱讚に驚倒に批評の矢を放たれたる、空前絶後の奇文を見よ

病骨錄 定價五拾錢
郵稅六錢
尾崎紅葉先生遺稿
嗚呼明治時代の大家尾崎紅葉先生が第一醫院の病室裡に枯槁を支へられつゝも紙に落ちたる天機神韻の大字曰く病骨錄曰く生死論曰く觀力とす、高敞なる想は篇々繰りて千丈の錦を成す、實に吾人が精神修養上、將又調達の軌範として千古に傳ふべき良書なり

人情の日本史 定價五拾錢
郵稅八錢
黒岩涙香君序 伊藤銀月君著
文界に異彩を放てる銀月君、拒の如き批評眼に燃ゆるが如き熱情を注ぎ、日本史の裏面を貫通せる活ける血の潮流に筆を染めて、獨創の人情觀的日本史を成す、之を一面より見れば新式なる三千年間の人物評也、紅爛櫻花を携ち、露酒玉盞に滴る、眞に是れ千古の痛快文字、現下の興奮的國民の讀物として此書の右に出るものある無し

社會訓 定價四拾錢
郵稅六錢
文學士 大町桂月君著
當代の才能大町文學士が○文藝○教育○宗教○道德○風俗○習慣等に關し大なる訓戒を與へられたる吾人必讀の良書也

筆のしづく 定價四拾錢
郵稅六錢
同文學士の○美文○論文○紀行○史傳○隨筆○韻文集等を集めたる、明治文壇の珍什也

さくらとばら 定價卅五錢
郵稅四錢
谷口賞華君著 永井尚行君譯
本書は神武天皇東征より日英同盟に至る二千五百有餘年間の我歴史に上掲著なるもの優劣精義なる和英兩文に對照して一は學生諸君の研究に供し、他は卓絶せる大日本の光輝を全世界に輝揚せる古今未嘗有の好著也

實驗雄辯學 定價卅五錢
郵稅六錢
屈山 小室重弘先生著
文明社會の戦は言論を武器として、輸贏を決せざるべからず、不辯者は竟に社會競争の上にて劣敗者たるを免かれず、本書は著者が多年の實驗に基き、辯論の秘訣を詳らかに用を講せられたる所から採り、故に學生諸君の必讀の妙書也、文明の國民たる者は一本を座右に備へ、自己の運命を向上發展せられよ

新時代の道德 定價卅五錢
郵稅四錢
正岡愛陽君著
本書は著者が道德觀を有體に思惟なく告白せしもの、氏の筆力世に定評あり然れども此書の如く大膽にして思想の嶄新なるもの氏に於て未曾有なると共に、又文壇の珍とすべきものなり

譽の毒盃 定價五拾錢
郵稅八錢
獨乙 エツカルト氏作 齋木仙醉君譯
本書は獨乙文豪エツカルトの傑作にして、材を希臘に取つたる大戯曲也、登場人物ククラテリス、プラトヘレナ其他幾多の人物紙上に活躍し人をして新奇思想の混濁たる時代に處する大見識を得せしむる一大燈明臺たるは嚆矢を要せず、脚色亦快絶妙絶

戰爭論 定價三拾三錢
郵稅六錢
湯淺觀明君著
菅綠蔭先生問 渡部竹蔭君著

明治の家庭 定價卅五錢
郵稅四錢
本書は我國現今の不完全、不規則極まれる、家庭を矯正せんが爲めに生れたので、理想の家庭を作らふと云ふ者は是非一讀せざるべからざる珍書なり

韓國成業策 定價卅五錢
郵稅四錢
佐藤政治郎君著

東京市本橋區箱屋町六十番地
文榮閣出版及發賣書目

久津見厥村君著 增訂六版
家庭教育のしつけ

定價廿五錢
郵稅四錢

本書は著者が該博の識と多年の實踐に依り幼稚時代、兒童時代、少年時代、青年時代の四段階に至る家庭教育の仕方、を一言一致にて十三章百六拾餘條に説き示されたるものなれば、女子にても容易に理解せられたるに實際に試むることを得べきやう記述せられたる近來稀に見る處の好著なり

鳴呼古英雄

定價四拾錢
郵稅八錢

古來の英雄傳數百人を撰來つて、縱横無盡に品評せる壯絶快絶の珍書なり
鳴呼今や暴徒の時にあたりて此書を讀む、何等の快感か是に如かんや
讀者新聞記者 安藤直方合著 多田鏡太郎

實業の葉

定價五拾錢
郵稅六錢

はらのや春雄著
洋行赤毛布

定價二拾錢
郵稅四錢

ドクトルユニーモア氏譯

英文赤毛布

定價三拾錢
郵稅四錢

新赤毛布

定價廿五錢
郵稅四錢

遠征新々赤毛布

定價四拾錢
郵稅六錢

渡米のしるべ

定價廿五錢
郵稅四錢

渡米成業手引

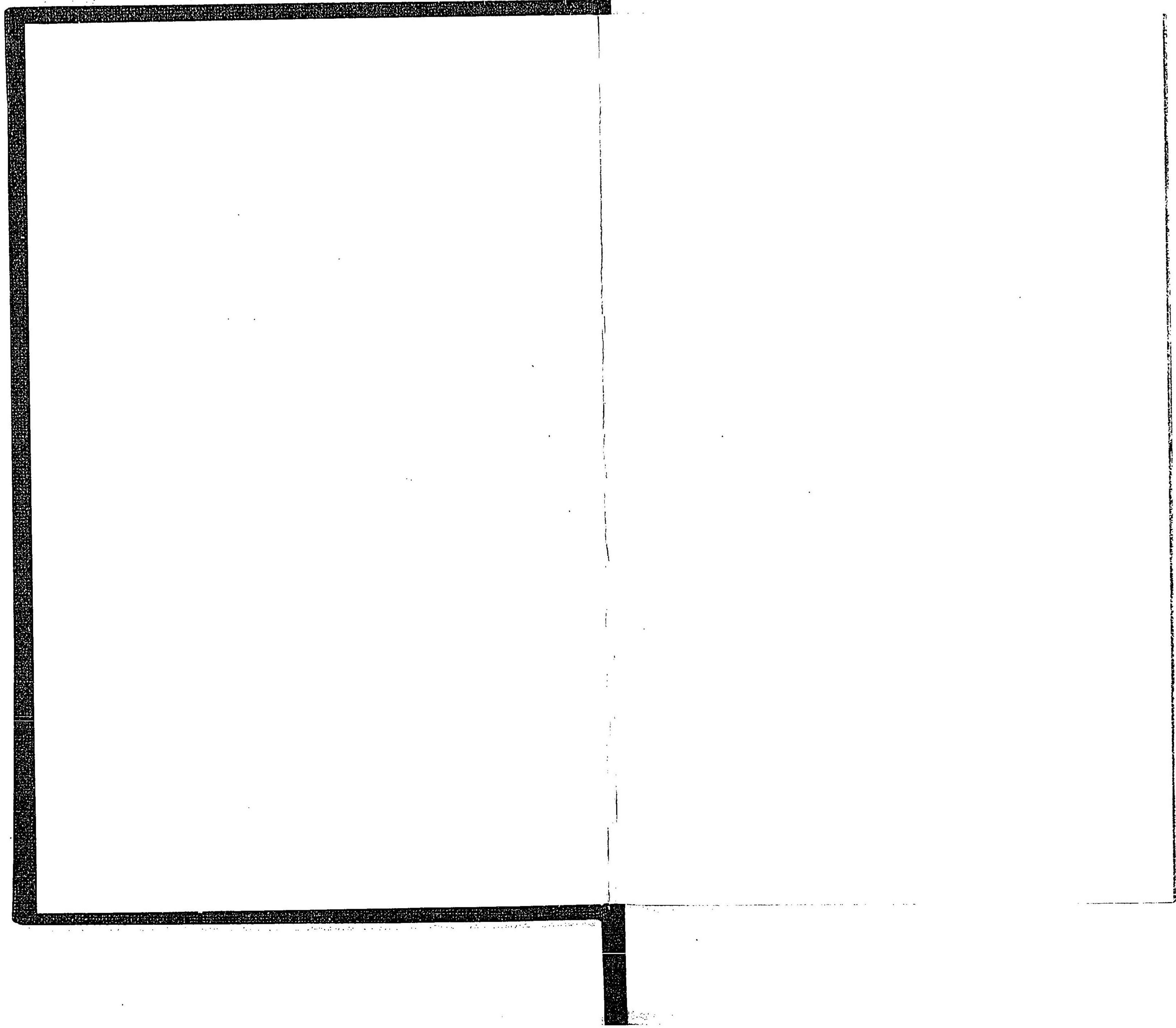
定價廿五錢
郵稅四錢

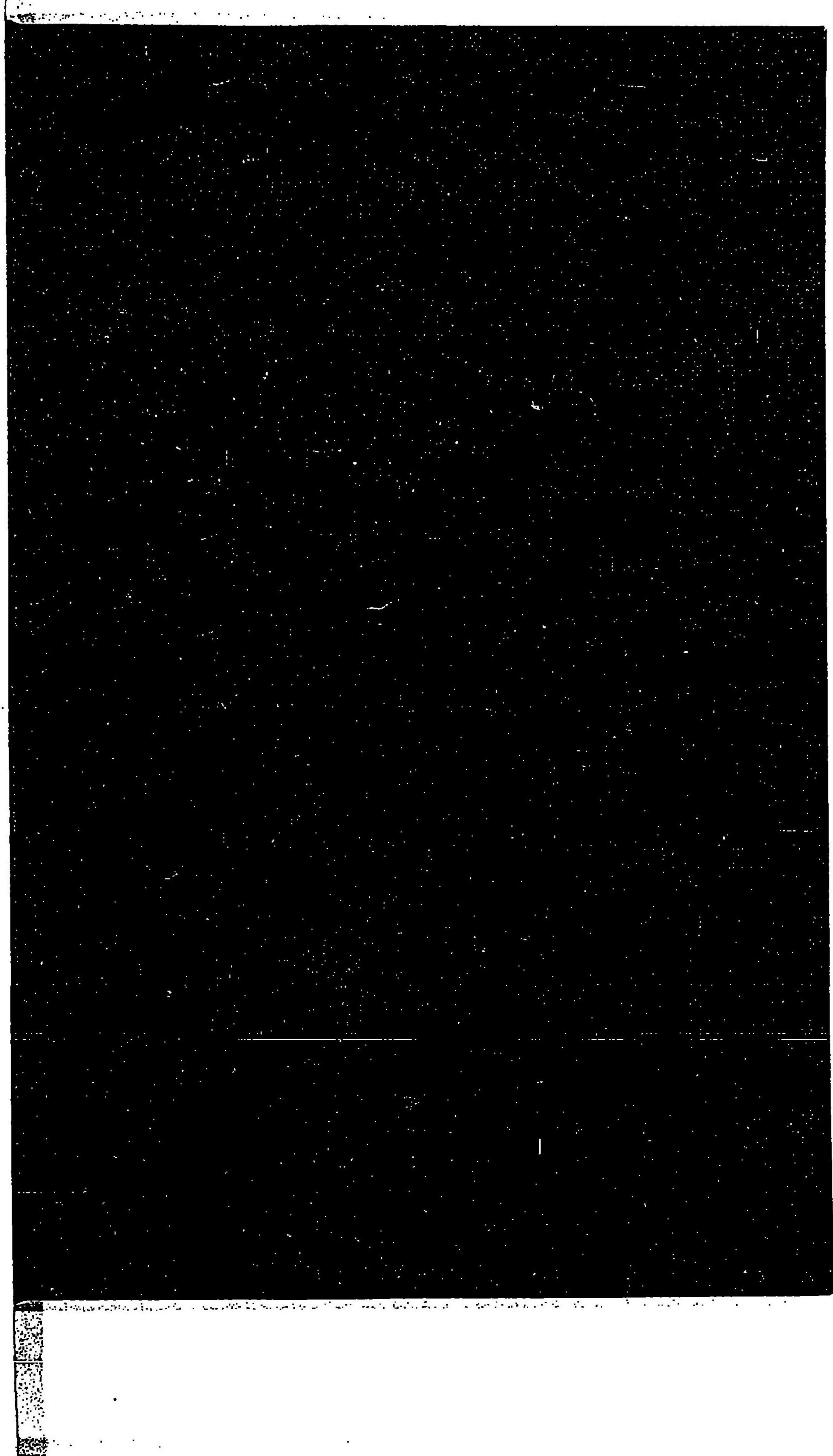
北米遊學案内

定價廿五錢
郵稅四錢









300001-000-3

H9-E21

宇宙觀

高橋五郎／著

1904. 12

AAA-0001

